

Title	19世紀前半のインドにおける経済不況と貨幣供給：貴金属貿易と貨幣鑄造
Sub Title	The economic depression, currency, and precious metals in India in the first half of 19th century
Author	谷口, 謙次(Taniguchi, Kenji)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.109, No.3 (2016. 10) ,p.471(77)- 502(108)
JaLC DOI	10.14991/001.20161001-0077
Abstract	<p>本稿では、 19世紀前半のインドにおける貴金属貿易および貨幣鑄造について数量データを用いて分析し、 当時貨幣不足が生じ、経済不況を招いたのかを考察する。1820年代から40年代に貴金属不足や貨幣不足は生じていたのか、地域的な差異は存在したのか、 貴金属貿易と貨幣鑄造にどのような関係があり、不況にどのような影響を与えたのか、 こうした問題を取り上げる。</p> <p>By analyzing the trade of precious metals into and out of India and the currency of the East India Company in the first half of 19th century India, I discuss the relationship between money shortage and the depression in India. This study answer the following questions; Did shortages of precious metals and currency really occur in India between 1820's and 1840's? Can differences be demarcated between the Presidencies in India vis-à-vis shortages of precious metals and currency? Are precious metals shortages correlated with currency shortages?</p>
Notes	特集：ベンガル社会経済史研究のフロンティア：植民地期を中心に 挿図
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20161001-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19世紀前半のインドにおける経済不況と貨幣供給

— 貴金属貿易と貨幣鑄造 —

谷口謙次*

(初稿受付 2016 年 9 月 20 日, 査読を経て掲載決定 2016 年 11 月 2 日)

The Economic Depression, Currency, and Precious Metals in India in the First Half of 19th Century

Kenji Taniguchi*

Abstract: By analyzing the trade of precious metals into and out of India and the currency of the East India Company in the first half of 19th century India, I discuss the relationship between money shortage and the depression in India. This study answer the following questions; Did shortages of precious metals and currency really occur in India between 1820's and 1840's? Can differences be demarcated between the Presidencies in India vis-à-vis shortages of precious metals and currency? Are precious metals shortages correlated with currency shortages?

Key words: Indian Economic History, Indian Colonial History, Asian Trade History, Indian Monetary History

JEL classifications: N15, N25, N75

本論文は 2015 年 12 月 10 日, 11 日に行われた International Conference “The Frontier of the Socio-Economic History of Bengal” での報告を加筆修正したものである。参加された先生方から多くのコメントをいただいたが, 特にビノイ・チャウドゥリ (Benay Chaudhuri) 先生から非常に重要なコメントを頂戴した。会を組織された神田さやこ先生と共に謝意を記したい。また, 執筆にあたって脇村孝平先生, 大橋厚子先生, 杉原薫先生, 神田さやこ先生, 安木新一郎先生から有益なコメントを頂戴した。あわせて謝意を記したい。なお, 本論文は JSPS 科研費 24320117 ならびに 15H03369 による研究成果の一部である。

* 大阪市立大学大学院経済学研究科
Graduate School of Economics, Osaka City University
catnap7@beige.plala.or.jp

1. 問題設定

近年、近代インド史の分水嶺について新たな議論が起こっている。1980年代まで近代インド史のそれは1757年のプラッシーの戦いと考えられてきた。18世紀初頭にムガル帝国が衰退したことでインドは混乱したが、イギリス東インド会社（正式名称：The English Company Trading to the East Indies、通常 the East India Company と呼ばれることから以下「東インド会社」と略す）がそれに乗じて「衰退した」インドを植民地化したと理解されてきた。しかし、1990年代に入り18世紀インドは社会経済的に発展と変動を続けており、特に地方でその傾向が強かったという研究が提出されるようになった。イギリスによる植民地化はこの発展・変動の過程で生じたとみなされたのであった。「18世紀再検討論」と呼ばれるこの議論は現在では定説とみなされるようになってきた。⁽¹⁾

例えば、18世紀のベンガルでは都市や広域で流通する高品位銀貨と特定の地域のみで流通する低品位銀貨、そして多様な少額貨幣が流通していた。通説では貨幣の多様性はベンガル経済の後進性を示すものだと理解されてきた。だが、近年の研究では貨幣の多様性は多様な市場圏の存在によって成り立っており、高品位銀貨は市場圏同士を結ぶ貨幣として利用され、低品位銀貨や少額貨幣は市場圏の中で流通したことが明らかとなった。貨幣流通の背景として、様々な商人や金融商などが高度な経済活動を行っていたのであった。⁽²⁾

プラッシーの戦いに代わる、新たな分水嶺として議論されているのが、19世紀前半の経済不況である。特に、1820年代から1840年代の間に価格下落、商業取引の低下、貿易の減少、農業生産の低迷、消費の落ち込み、人口減少などが生じたと指摘されたが、この時期は18世紀後半の植民地化の影響が明確に表れた時代だとみなされている。⁽³⁾ 不況論を概観すると、貿易構造の変化と経済不況の関係については、K.N. チャウドゥリが19世紀第二四半期の商品貿易と貴金属貿易の分析を行っている。本論文の議論に関わることから詳述しよう。彼によると、東インド会社はベンガルでの植民地獲得以降、税収余剰などのイギリスへの送金を貴金属輸出でなく商品輸出の形式で行ってきた。

(1) 「再検討論」をまとめたものとしては以下を参照。P.J. Marshall (ed), *The Eighteenth Century in Indian History: Evolution or Revolution?* (Oxford University Press, New Delhi, 2003)；中里成章「インドの植民地化問題・再考」(山内昌之編『岩波講座 世界歴史 23 アジアとヨーロッパ』岩波書店、1999)。

(2) 貨幣の多様性と市場構造については以下を参照。黒田明伸『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』(岩波書店、2003年)、73～84ページ；谷口謙次「近世南アジアの貨幣制度と18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性」『松山大学論集』第24巻第4-2号、2012年、317～330ページ。

また、18世紀ベンガルの市場構造については以下を参照。三木(神田)さやこ「18世紀末～19世紀前半におけるベンガルの穀物流通システム」『社会経済史学』第66巻第1号、2000年；谷口晋吉「18世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農民市場に関する一試論」『一橋論集』第116巻第6号、1996年。

貴金属を輸出すれば、インド経済に悪影響が生じると考えられていたからであった。インドの貿易構造は19世紀に入って大きく変化し、輸出品の中心が綿織物から第一次産品へ移った。だが、綿織物と異なり第一次産品輸出には輸入国の需要や景気変動に大きく影響されるという問題が存在した。インドの主要貿易相手国はイギリスと中国であったが、19世紀第二四半期のイギリスは度重なる金融恐慌が生じて不況となっており、中国でも不況やアヘン戦争が起こっていた。その結果、第一次産品価格は低迷し、インド国内で農業不況が生じていた。⁽⁴⁾

貴金属貿易は商品貿易だけでなく国際決済システムとも密接に関係していた。東インド会社やイギリス私貿易商がイギリス本国と決済を行う場合、貴金属輸出・商品輸出・為替手形の三つの方法が存在した。K.N. チャウドゥリによれば、東インド会社と私貿易商を合わせたイギリスへの年平均送金総額は、19世紀第二四半期で400～450万ポンド程度であったが、インドにおけるイギリスと中国両地域への貿易黒字がこれを超えていれば、商品輸出の形式や為替手形で十分に可能であった。中国への貿易黒字はイギリス—中国の茶貿易の形式で移転可能であったためであった。しかし、1830年代以降商品輸出が低迷し、特に主力商品である藍輸出が急減したために、為替手形需要が高まり貴金属現送点を越えた。1831-32年度と1832-33年度には貴金属輸出が輸入を上回ることとなった結果、1830年代に貴金属不足が生じ、価格下落をさらに促すこととなったのであった。⁽⁵⁾

これに対して、インド国内の有効需要の減少を指摘した議論も存在する。それらが示す要因として、1) 東インド会社が様々な重税を課したが、それは彼らが行政費用や軍隊維持費を捻出するためであった。その結果、農民はますます換金作物の作付けに傾斜したが、輸送インフラの整備が不十分であったために深刻な供給過剰、つまり農業不況をもたらした。2) 宮廷エリートや軍隊が急速に崩壊したために、それらが担っていた穀物や嗜好品への需要が減少した。東インド会社軍の規模ははるかに小さかったために、その穴を埋めることができなかった。さらに、3) 植民地政府が鑄造所を数ヶ所閉鎖したために、短期の流動性が低下してしまったことと、4) インド域内市場にイギリス製綿製品が流入した結果、インド産綿製品の生産が大きく縮小したことを挙げたのであった。⁽⁶⁾ これらの議論は主に実体経済を扱っているが、貨幣的側面を主に論じる議論も存在する。P.J. トーマス

(3) 19世紀前半インドに関する議論をまとめたものについては以下を参照。I. Barrow and D.E. Haynes, “The Colonial Transition: South Asia, 1780-1840”, *Modern Asian Studies*, 38, 3; 神田さやこ「19世紀前半のインド経済——「過渡期」をめぐる研究動向」, 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望——社会経済史学会創立80周年記念』有斐閣, 2012年。

(4) K.N. Chaudhuri, “India’s Foreign Trade and the Cessation of the East India Company’s Trading Activities, 1828-40”, *The Economic History Review*, Vol.19, No.2, 1966, pp.346-355.

(5) K.N. Chaudhuri, “India’s Foreign Trade”, pp.355-363.

(6) C.A. Bayly, *Indian Society and the Making of the British Empire*, The New Cambridge History of India Vol.II-2 (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), pp.123-124; D.A. Washbrook, “Progress and Problems: South Asian Economic and Social History c.1720-1860”, *Modern Asian Studies*, 22-1, 1988, p.79.

と B. ナタラジャンはマドラスの事例から、19 世紀第二四半期の経済不況をデフレーションとみなし、貨幣供給と貨幣需要の両面から論じた。彼らによれば、当該期に貨幣供給が減少したが、その要因は、1) 当該期に貴金属がインドから流出したため、2) 1835 年の貨幣統一条例によって新銀貨（会社ルピー：Company's Rupee）鑄造が決定したが、インド全土の需要に見合う銀貨供給量が行われなかったためである。⁽⁷⁾ 他方で、貨幣需要は増加したが、それは 1) 地税や民間および軍事取引に貨幣が導入されたこと、2) 19 世紀前半に人口が増加し、穀物輸入が増加したこと、と論じた。⁽⁸⁾

これらに対して、近年 19 世紀前半の経済不況の再検討を行う議論が複数現れている。杉原薫によると、19 世紀前半のインド貿易は大幅に増加し、1830 年代であってもその傾向に大きな変化は見られなかった。それは対英貿易だけでなく、現地経済と結びついたアジア間貿易の役割が重要であったとした。⁽⁹⁾ T. ロイは、労働の分析から 19 世紀前半に綿製品を中心とする手工業生産の減少は生じていたが、それは従来論じられていたよりも程度が小さく、深刻な経済不況を招くものではなかったとした。彼によれば、当該期に雇用の減少は生じていたが、それは通説よりも長期間均等に減少した。賃金の減少も生じていたが、それはむしろ織物などの価格下落によって需要に有利に働いたと論じた。⁽¹⁰⁾

神田さやは、インド人商人が 18 世紀末から 19 世紀前半に東インド会社が形成した植民地経済に適応し、それを利用して利益を上げる構造を作り出したことを示した。彼女によれば、1772 年に始まった東インド会社による塩独占は 1820～30 年代に崩壊したが、それはこの時期に東インド会社が形成した新秩序の弱体化が表面化し、インド人商人を含む自由貿易構造が形成されたためであった。そこから、有効需要の減少と相反する、域内貿易の成長やその背景となる生産の拡大の重要性を指摘している。⁽¹¹⁾ 高橋昭子と水島司は、南インドの事例から 19 世紀前半のインドで人口増加が見られたが、それは耕地面積の拡大によるものであることを GIS（地理情報システム）の利用によって明らかにした。⁽¹²⁾ また、A.S.M.A. フセインは 19 世紀前半のベンガルの事例で、R. ステュダーはインド全体で穀物価格の分析を行い、当該期の価格は比較的安定し、深刻なデフレーションは生じていな

(7) 19 世紀前半の貨幣統一政策については以下を参照。S. Ambirajan, *Political Economy and Monetary Management* (Madras: Affiliated East-West Press, 1984), Chapter 3.

(8) P.J. Thomas and B. Natarajan, “Economic Depression in the Madras Presidency”, *The Economic History Review*, Vol.7, No.1, 1936.

(9) 杉原薫「19 世紀前半のアジア交易圏」（籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク——長期の 19 世紀』、世界思想社、2009 年）。

(10) Tirthankar Roy, *Rethinking Economic Change in India* (New York: Routledge, 2005), pp.106–118.

(11) 神田さやこ「環ベンガル湾塩交易ネットワークと市場変容——1780–1840 年」（籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク——長期の 19 世紀』、世界思想社、2009 年）。

(12) 高橋昭子・水島司「人口と土地開発の長期変動」（水島司・川島博之編『激動のインド 第 2 巻 環境と開発』、日本経済評論社、2014 年）。

かったと論じた。⁽¹³⁾

しかし、これらの議論のほとんどは実体経済を論じたものである。また、A.S.M.A. フセインや R. ステュダーは価格について論じているが、その変動要因である貨幣供給については触れていない。そこで、本論文では 19 世紀前半のインドにおける貨幣供給、特に貴金属貿易と貨幣鑄造を分析し、それが当該期の経済変動とどのような関係であったのかを考察する。すでに見たように、K.N. チャウドゥリや P.J. トーマスと B. ナタラジャンの研究は 19 世紀前半の貴金属貿易の重要性を指摘しているが、K.N. チャウドゥリは 1828–29 年度から 1839–40 年度までのみを論じており、P.J. トーマスと B. ナタラジャンは具体的な数量データを提示していない⁽¹⁴⁾。近年では、I. ライは 17 世紀後半から 19 世紀前半までのベンガルにおける貴金属貿易を分析する研究で、19 世紀前半の詳細なデータを提示している。しかし、彼の研究は 200 年間の変動を知ることがテーマであり、19 世紀前半の不況との関連については論じられていない。また、マドラス管区やボンベイ管区についても言及していない⁽¹⁵⁾。

そこで本論文では以下の三点について論じることとする。第一に、19 世紀前半の貴金属貿易の傾向を分析する。不況期とされる 1830 年代から 40 年代に貴金属不足が生じていたかが重要な課題であろう。また、ベンガル・マドラス・ボンベイの各管区のそれにどのような相違があるのかも分析する。第二に、当該期の貴金属貿易相手国・地域について分析する。第一の論点と同様に三管区の相違についても論じるが、資料の限界から 1810–11 年度から 1827–28 年度の間に限定される。第三に、当該期の貨幣鑄造の傾向を分析する。三管区の相違はもちろん、貴金属貿易との関係についても考察することとする。P.J. トーマスと B. ナタラジャンが指摘した 1835 年以降に貨幣供給不足が生じていたかが重要な課題となろう。

最後に、資料について説明しよう。主に利用したのはイギリス議会資料 (*British Parliamentary Papers*: 以下議会資料と略する) と J. プリンセプの *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic, of the Late James Prinsep, F.R.S., secretary to the Asiatic Society of Bengal* である⁽¹⁶⁾。

(13) A.S.M.A. Hussain, “A Quantitative Study of Price Movements in Bengal During Eighteenth and Nineteenth Centuries.” (unpublished Ph.D. thesis, University of London, 1976); Roman Studer, “India and the Great Divergence: Assessing the Efficiency of Grain Markets in Eighteenth- and Nineteenth Century India”, *The Journal of Economic History*, Vol.68, No.2, 2008, pp.397–398.

(14) 以下の論文では 1814–15 年度から 1854–55 年度までのデータを示しているが、通年データでなく、また 19 世紀前半全体をカバーしていない。K.N. Chaudhuri, “Introduction” in K.N. Chaudhuri (ed.), *The Economic Development of India under the East India Company 1814–58* (Cambridge: Cambridge University Press, 1971), p.25.

(15) Indrajit Ray, *Bengal Industries and the British Industrial Revolution (1757–1857)* (New York: Routledge, 2011), pp.34–40.

東インド会社はイギリス議会で膨大な報告書を提出しており、その報告書などを所蔵する議会資料は18世紀後半から19世紀前半のインドを知る重要な資料群であるが、原資料が示されていないことに注意が必要である。⁽¹⁷⁾年代順に見ていくと、まず1831-32 (734) (735-I) (735-II) (735-III) (735-IV) (735-V) (735-VI) *Report from the Select Committee on the Affairs of the East India Company; with minutes of evidence in six parts, and an appendix and index to each* は、1830年代に議会で設置された「東インド会社の諸業務に関する特別委員会 (Select Committee on the Affairs of the East India Company)」のうち1831-32年度に置かれたものの膨大な報告書であり、公共、財政(貿易)、歳入、司法、軍事、外交の六部から成っている。利用した資料 *Appendix No.13 Statement of the Account of All treasure Imported into, Exported from, the Three Presidencies in India, respectively, in each Year, from 1810-11 to the latest Period; distinguishing Europe and America from China, the Eastern Lands, and other principal Places, exclusive of Shipments from Port to Port* は財政(貿易) (735-II) に含まれる、1810-11年度から1827-28年度までの取引国・地域別の貴金属貿易の数量データである。ルピー建てであるが、1832年はインドの貨幣統一条例が出される前であり、どの地域のルピーか不明である。そのため、本論文ではポンド=スターリング換算せず、ルピー建てで示すこととする。⁽¹⁸⁾

次に、1833 (390) *Gold and silver (India and China trade)* は、1795-96年度から1830-31年度までのインド三管区における貴金属貿易の数量データである。データは会計年度で分けられ、各管区で流通するルピー銀貨で表示されている。⁽¹⁹⁾ベンガル・マドラスでは金銀が区別されているが、ボンベイでは区別なく記載されている。

(16) James Prinsep (ed. E.Thomas), *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic, of the Late James Prinsep, F.R.S., secretary to the Asiatic Society of Bengal: to which are added his useful tables, illustrative of Indian history, chronology, modern coinages, weight measures, etc.* (New Delhi: Asian Educational Services, 1995[original 1858]), Vol.2.

(17) 1830年代の議会資料と東インド会社の関係については、以下で詳細に論じられている。松本陸樹「イギリス東インド会社と19世紀イギリス議会資料——京セラ文庫「英国議会資料」の創設によせて」、『東南アジア研究年報』40, 1999年, 21~22ページ。

(18) 東インド会社の会計年度は5月1日から翌年4月30日までとなる。

(19) 1833 (390) *Gold and silver* ではシッカ・ルピー (Sicca Rupee), アルコット・ルピー (Arcot Rupee), マドラス・ルピー (Madras Rupee), ボンベイ・ルピー (Bombay Rupee) の4種のルピーで表記されている。本論文では以下の資料から、1シッカ・ルピー=2シリング3.84ペンス, 1アルコット・ルピー=2シリング3.428ペンス, 1マドラス・ルピー=2シリング3.408ペンス, 1ボンベイ・ルピー=2シリング3ペンスとして、スターリング・ポンドに換算して図表を作成した。

1830 (644) *First report from the Select Committee on the Affairs of the East India Company. (China trade.) B.P.P., p.iii, Appendix p.98.*

貨幣の多様性については注2を参照。

最後に 1864 (133) *East India (bullion)* には、1801 年から 1863 年までのインド三管区における貴金属貿易および貨幣鑄造額の数量データが示されている。この資料は会計年度でなく年表示となっており、ポンド＝スターリング表示である *Gold and silver* 同様、ベンガル・マドラスでは金銀が区別されているが、ボンベイでは区別なく記載されている。貨幣鑄造額のデータについては以下の点で注意が必要である。マドラスの項目では、1) 1801 年から 1807 年までのデータがなく、2) 1808 年から 1820 年までは 2 ケ年から 4 ケ年の合算で表記されている。さらに、3) 1836 年から 41 年まで鑄造所が閉鎖していた。また、ボンベイの項目でも 1824 年から 31 年までのデータが欠けている。

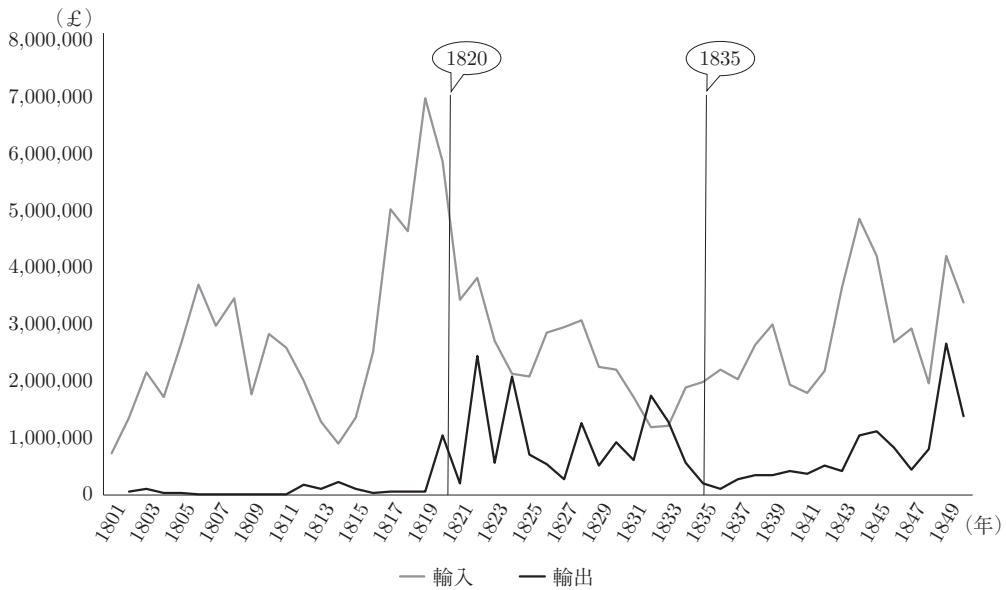
J. プリンセプの *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic* はインド古代史に関する論文であるが、その中心は貨幣史である。J. プリンセプ (James Prinsep: 1799–1840) は植民地官僚として働きながら、インド古代研究で業績をあげた人物であった。彼は東インド会社で試金官 (Assay Master) としてベナレスとカルカッタの鑄造所に勤務したが、その間に西ヨーロッパ式の貨幣制度の導入に尽力、1835 年の貨幣統一条例制定に貢献した。その傍ら、古代インド史研究にも情熱を傾け、プラフミー文字とカシュティー文字の古代文字を解読した。また、古代インド貨幣研究にも力を入れ、古代貨幣の碑文を手掛かりにしてアショーク王石柱碑文の解読に成功したのであった。⁽²⁰⁾ ここでは、1813–14 年度から 1853–54 年度までのインド三管区の貴金属貿易と 1801–02 年度から 1854–55 年度までの貨幣鑄造額の数量データを利用した。貴金属貿易に関しては、ポンド＝スターリング表示で金銀の区別はないが、輸出入差額が示されている点の特徴であろう。貨幣鑄造額については、1801–02 年度から 1832–33 年度まではベンガル管区のみのものでありシッカ・ルピーで表示され、1833–34 年度以降は三管区のデータがあり会社ルピーで表示されている。⁽²¹⁾

なお、本論文では 19 世紀前半を三つの時期に区切って分析を行う。1801 年から 1820 年 (会計年度では 1819–20 年度) を第一期、1821 年から 1835 年 (会計年度 1834–35 年度) までを第二期、1836 年から 1850 年 (会計年度 1849–50 年度) までを第三期と呼ぶこととする。

(20) 辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典』(平凡社、1992 年)、649 ページ；ジョナサン・ウィリアムズ編 (湯浅赳男訳)『図説 お金の歴史全書』(東洋書林、1998 年)、165～169 ページ。

(21) 本論文では、1 会社ルピー = 1.066 シッカ・ルピー = 1 シリング 10 ペンスとして、スターリング・ポンドに換算して図表を作成した。以下を参照。Prinsep, *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic*, p.54, p.86.

グラフ1 インドにおける貴金属貿易：1801-1850年



出典：表1から筆者作成。

2. 19世紀前半インドにおける貴金属貿易

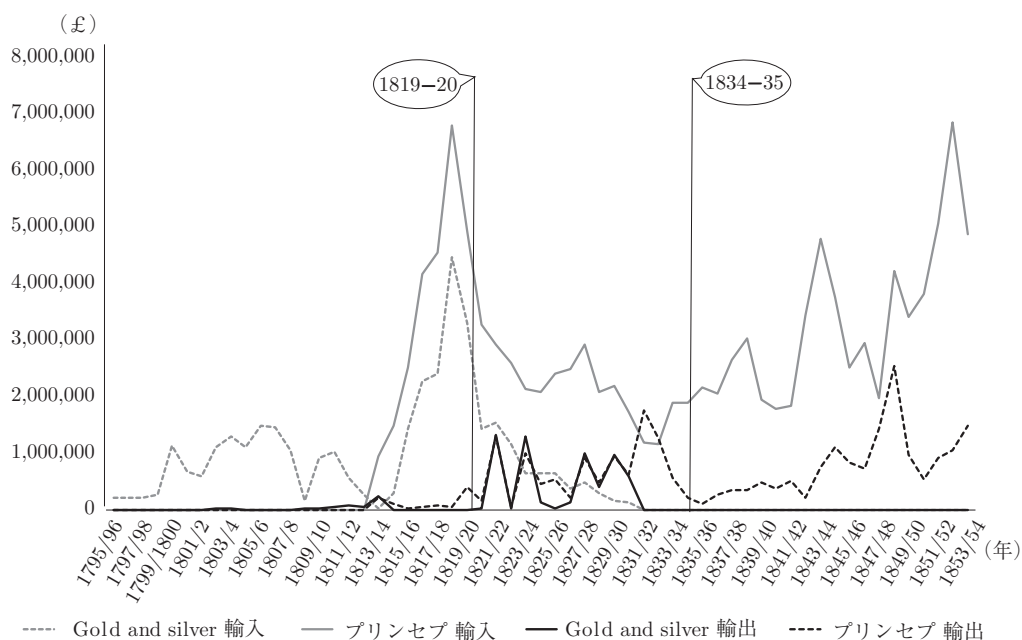
1) インドの貴金属貿易の傾向

グラフ1, グラフ2, および表1はインドにおける貴金属輸出入を表している。年度表示と年表示の相違はあるが、グラフ1と2はどちらも同じ傾向を示している。第一期から見てみよう。貴金属輸入は1800年代に増加し、その後減少したが、1814年以降急増した。表1によれば、1814年には89万8369ポンドであったものが、翌15年には136万6636ポンドに増加。その後も増加を続け、1819年には698万6259ポンドとわずか5年間で7倍以上も増加したのであった。1800年代の増加は第二次マラータ戦争（1803～1805年）によるものであったが、1814年以降の増加は東インド会社によるインド独占貿易の終結による私貿易の急増と第三次マラータ戦争（1817～1818年）が関係している⁽²²⁾。K.N. チャウドリによれば、1814年にはナポレオン戦争の終結や貨物運賃の削減が行われたことも貿易を後押しした。こうしたブームは1817-18年度が頂点となった。しかし、私貿易商の激増と競争の激化によって、利益率は縮小していった⁽²³⁾。こうした貴金属輸入の激増に対し

(22) 谷口謙次「18世紀後半のベンガルにおける銀不足問題とベンガル植民地政府財政」、『経済学雑誌』第112巻4号、2012年、79ページ。

(23) K.N. Chaudhuri, “Introduction”, pp.27-28.

グラフ2 インドにおける貴金属貿易：1795/96-1853/54年



出典：1833 (390) *Gold and silver (India and China trade)*, B.P.P, pp.2-8 および James Prinsep (ed. E.Thomas), *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic, of the late James Prinsep, F.R.S., secretary to the Asiatic Society of Bengal: to which are added his useful tables, illustrative of Indian history, chronology, modern coinages, weight measures, etc.* (New Delhi: Asian Educational Services, 1995[original 1858]), Vol.2, p.82.

て、輸出はほとんど行われなかった。

しかし、第二期に入ると、傾向は大きく変化した。1820年から1833年まで輸入は減少し続けた一方、輸出は大幅に増加した。第一期の年平均純輸入額は約260万ポンドあったものが第二期のそれは約166万ポンドと約100万ポンドも減少し、1832年と1833年には輸出が輸入を上回った。こうした傾向は、インド私貿易ブーム終焉による投資の引き上げとイギリスにおける1825年恐慌の影響による貿易黒字の減少を示している。

第二期の終わりごろから再び傾向は変化し、第三期には輸入は増加し、輸出は急減した。この傾向は1840年代半ばまで続き、1836年から1845年までの年平均純輸入額は約236万ポンドまで回復した。この時期に輸出貿易が回復傾向になったことが要因であろう。だが、その後再び輸入の急減、輸出の急増が生じ、1846年から1850年までの年平均純輸入額は約182万ポンドまで減少した。後述するように、これはイギリスの1847年恐慌の影響だと考えられる。以上の分析から明らかになったのは、第一に通説よりも早く1820年代から貴金属不足が生じていた可能性である。また、そ

(24) K.N. Chaudhuri, "India's Foreign Trade", p.347, Table I.

表1 インドにおける貴金属貿易：1801-1850年

(£)

年	ベンガル				マドラス			ボンベイ			総計
	金	銀	区別なし	合計	金	銀	合計	金	銀	合計	
1801	116,715	618,132		734,847							734,847
1802	54,137	669,384		723,521	223,539	298,920	522,459			123,183	1,369,163
1803	81,376	1,087,474		1,168,850	34,450	497,949	532,399			464,888	2,166,137
1804	91,635	946,308		1,037,943	67,673	248,721	316,394			369,816	1,724,153
1805	89,520	1,068,865		1,158,385	29,018	440,343	469,361			1,027,585	2,655,331
1806	163,089	1,127,691	1,040,886	2,331,666	48,079	148,903	196,982			1,181,312	3,709,960
1807			2,764,813	2,764,813	36,732	175,828	212,560				2,977,373
1808	164,699	1,199,200	1,255,805	2,619,704	10,780	121,026	131,806			706,156	3,457,666
1809	57,882	589,367	615,473	1,262,722	6,610	35,814	42,424			466,620	1,771,766
1810	58,999	1,736,202	218,675	2,013,876	14,398	193,480	207,878			617,303	2,839,057
1811	76,070	1,758,004		1,834,074	9,633	237,160	246,793			512,715	2,593,582
1812	112,651	562,619	515,000	1,190,270	21,329	298,894	320,223			508,165	2,018,658
1813	90,336	665,217	143,700	899,253	7,473	139,783	147,256			236,204	1,282,713
1814	79,105	469,299		548,404	25,823	116,320	142,143			207,822	898,369
1815	139,031	829,613		968,644	18,560	82,262	100,822			297,170	1,366,636
1816	134,592	1,668,815		1,803,407	19,799	91,460	111,259			604,788	2,519,454
1817	146,419	3,038,780	875,318	4,060,517	18,372	155,741	174,113			801,274	5,035,904
1818	185,754	3,016,949	95,113	3,297,816	28,552	144,232	172,784			1,166,679	4,637,279
1819	237,604	4,481,645	197,666	4,916,915	48,362	189,573	237,935			1,831,409	6,986,259
1820	368,128	3,696,474	914,796	4,979,398			180,595			705,903	5,865,896
1821	243,833	2,117,891	152,540	2,514,264	32,886	206,336	239,222			670,232	3,423,718
1822	113,490	2,931,964		3,045,454	20,872	232,627	253,499			520,276	3,819,229
1823	83,861	1,622,981		1,706,842	21,722	290,402	312,124			680,393	2,699,359
1824	146,607	1,152,934		1,299,541	8,105	115,883	123,988			697,942	2,121,471
1825	98,583	841,642	245,807	1,186,032	18,883	163,772	182,655			715,703	2,084,390
1826	98,026	942,971	451,482	1,492,479	19,772	202,153	221,925			1,132,878	2,847,282
1827	304,858	923,975	476,844	1,705,677	9,703	261,393	271,096			964,594	2,941,367
1828	212,957	1,201,001	157,690	1,571,648	35,963	215,905	251,868			1,250,191	3,073,707
1829	90,121	565,731	173,398	829,250	16,399	131,491	147,890			1,270,492	2,247,632
1830				981,025	14,246	94,998	109,244			1,102,200	2,192,469
1831				601,214	7,046	106,690	113,736			1,015,313	1,730,263
1832				354,484	7,022	85,163	92,185			735,587	1,182,256
1833				517,108	9,078	133,968	143,046			557,924	1,218,078
1834				569,476	4,632	109,895	114,527			1,193,438	1,877,441
1835				646,225	7,094	146,021	153,115			1,177,230	1,976,570
1836				687,168	6,688	106,072	112,760			1,409,661	2,209,589
1837				612,527	666	75,182	75,848			1,347,682	2,036,057
1838				1,048,883	1,499	126,974	128,473	298,388	1,164,287	1,462,675	2,640,031
1839				1,219,031	13,018	118,087	131,105	159,106	1,501,648	1,660,754	3,010,890
1840				1,226,786	547	111,659	112,206	30,186	575,885	606,071	1,945,063
1841				918,808	1,600	66,546	68,146	45,258	754,041	799,299	1,786,253
1842				1,337,594	746	66,815	67,561	46,931	737,226	784,157	2,189,312
1843				1,867,888	115	79,298	79,413	57,823	1,657,344	1,715,167	3,662,468
1844				1,828,191	46	115,105	115,151	225,943	2,701,118	2,927,061	4,870,403
1845				2,041,335	2,592	185,969	188,561	543,172	1,439,373	1,982,545	4,212,441
1846				1,190,221	16,872	154,426	171,298	372,054	960,601	1,332,655	2,694,174
1847	215,531	1,120,697		1,336,228	27,596	119,603	147,199	609,712	846,782	1,456,494	2,939,921
1848	362,555	384,668		747,223	51,498	78,228	129,726	634,725	459,289	1,094,014	1,970,963
1849	457,172	957,437		1,414,609	34,285	78,786	113,071	910,291	1,762,405	2,672,696	4,200,376
1850	338,604	876,261		1,214,865	55,345	66,092	121,437	765,599	1,293,439	2,059,038	3,395,340

表1 続き

(£)

年	ベンガル				マドラス			ボンベイ			総計
	金	銀	区別なし	合計	金	銀	合計	金	銀	合計	
1801											
1802				21,941	76	19,502	19,578			6,594	48,113
1803				41,681	812	37,385	38,197			15,713	95,591
1804				25,101		8,181	8,181			1,473	34,755
1805				12,952		3,033	3,033			1,504	17,489
1806						3,582	3,582			225	3,807
1807						151	151				151
1808						650	650			14,809	15,459
1809						487	487			3,086	3,573
1810		2,830		2,830	2,457	4,983	7,440			4,451	14,721
1811						6,340	6,340			1,965	8,305
1812				61,467		6,830	6,830			95,083	163,380
1813				6,009		39,933	39,933			52,958	98,900
1814				4,275	12,989	17,747	30,736			181,043	216,054
1815				15,462	2,130	7,935	10,065			65,168	90,695
1816				1,575		10,587	10,587			7,565	19,727
1817				16,900	350	24,067	24,417			4,216	45,533
1818		31,725		31,725		4,415	4,415			26,417	62,557
1819	3,800	24,154		27,954	4,500	6,309	10,809			5,763	44,526
1820	20,763	289,129	650,813	960,705			18,928			61,639	1,041,272
1821	410	113,526	30,812	144,748		1,425	1,425			46,624	192,797
1822		1,239,639	1,131,641	2,371,280	75	16,915	16,990			46,800	2,435,070
1823	546	1,048	509,162	510,756	309	14,986	15,295			39,015	565,066
1824		756,583	1,098,174	1,854,757	35,332	34,897	70,229			156,653	2,081,639
1825	85	160,805	260,304	421,194	10,057	207,625	217,682			65,235	704,111
1826	5	13,865		13,870	7,650	497,341	504,991			13,598	532,459
1827	7,478	104,025	50,646	162,149	62,679	7,523	70,202			26,619	258,970
1828	82,500	365,599	345,872	793,971	170,334	221,053	391,387			70,327	1,255,685
1829	4,459	171,860	30,000	206,319	57,301	53,007	110,308			200,094	516,721
1830				164,032	46,180	492,428	538,608			229,746	932,386
1831				330,503	8,664	104,113	112,777			161,938	605,218
1832				1,144,547	53,843	336,143	389,986			203,182	1,737,715
1833				783,353	47,102	254,367	301,469			198,562	1,283,384
1834				247,552	118,400	82,964	201,364			115,348	564,264
1835				66,555	26,854	75,092	101,946			32,449	200,950
1836				56,599	2,919	28,610	31,529			25,745	113,873
1837				161,316	1,199	71,416	72,615			30,002	263,933
1838				140,433	2,456	103,548	106,004	11,002	82,789	93,791	340,228
1839				162,760	550	90,687	91,237	2,000	91,859	93,859	347,856
1840				200,017	68	127,379	127,447	270	91,859	92,129	419,593
1841				146,206	572	88,728	89,300		130,979	130,979	366,485
1842				159,155	377	180,105	180,482		175,427	175,427	515,064
1843				272,934	46	25,271	25,317	1,000	116,545	117,545	415,796
1844				485,795		21,600	21,600		538,419	538,419	1,045,814
1845				396,543		65,053	65,053	9,353	635,890	645,243	1,106,839
1846				287,079		65,764	65,764	6,440	456,703	463,143	815,986
1847				0	35	68,134	68,169	2,855	360,295	363,150	431,319
1848	3,000	280,404		283,404	2,940	211,323	214,263	6,722	299,982	306,704	804,371
1849		905,071		905,071	1,110	732,738	733,848	10,494	1,012,834	1,023,328	2,662,247
1850	41,226	739,152		780,378	1,367	71,191	72,558	440	538,278	538,718	1,391,654

出典：1864 (133) *East India (bullion)*, B.P.P., pp.2-3.

の回復も早く 1830 年代半ばにあったことである。第二に、貴金属不足の要因が通説と異なり「貴金属輸出の増加」よりも「貴金属輸入の減少」であったことである。

次に、各管区の貴金属貿易を見ることとしよう。グラフ 3, グラフ 4 は各管区の貴金属輸入および輸出を表している。取引額が圧倒的に多いベンガルはインド全体とほぼ同じ傾向を表している。貴金属輸入額が最低を記録した 1830 年代前半と急減している 1840 年代後半にはカルカッタにおいて金融危機が起こっている。これらはいずれもイギリスにおける金融危機とそれに伴う第一次産品価格の下落が大きく影響したと考えられる。18 世紀末からベンガルの商品輸出に大きな影響を及ぼしていた代理商は、1825 年恐慌による藍価格暴落の影響により 1829 年以降大部分が倒産してしまった。その後、多くの代理商が再建したが、それらに投資していたユニオン銀行 (Union Bank) が 1847 年恐慌の影響で倒産したために、再びその多くが倒産したのであった。グラフ 3, 4 を見ると、ベンガルでは 1820 年代から貴金属輸入は急減し、輸出が急増していたことから、30 年代前半の金融危機のほうが影響は大きかったと考えられよう。

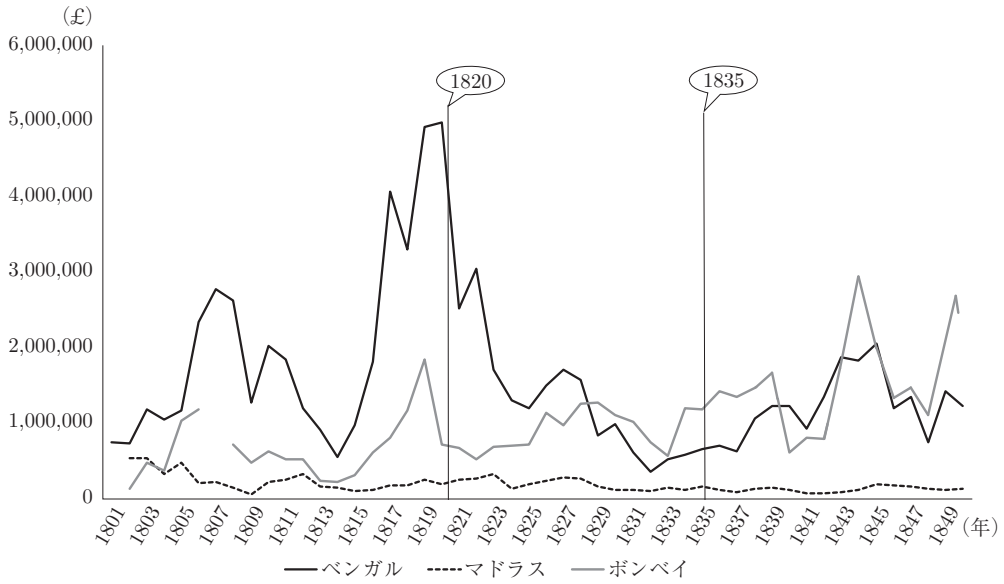
ベンガルに対して、ボンベイ・マドラスは全く異なる特徴を持っている。ボンベイでは貴金属輸入は多少の変動があるにせよ、順調に伸びていった。第二期には年平均約 90 万ポンドを超え、第三期には年平均で約 150 万ポンドを超えるまでになった。ボンベイは 1830 年以降急速に成長したと言われるが、こうした貴金属輸入の増加はそれらを裏付けているだろう。⁽²⁶⁾ 貴金属輸出は第二期である 1824 年から増加したものの、ベンガルのような急増ではなく 1824 年から 1834 年までの年平均輸出額はわずか約 13 万 1000 ポンドに過ぎなかった。逆に、第三期の輸出急増はベンガルと同程度であり、1841 年から 1850 年までの年平均輸出額は約 43 万ポンドに達した。ボンベイでは 1847 年恐慌の影響が大きかったことをうかがわせている。

他方で、マドラスは他の二管区と比べると、貴金属輸入が 19 世紀前半を通して非常に少なかった。だが、輸出は第二期に激増し、1826 年から 1835 年までの年平均輸出額は約 27 万 2000 ポンドになり、年平均純輸出額も約 11 万ポンドに達した。第三期に入っても輸入と輸出が均衡する状況が続く中、1847 年恐慌の影響で 1848 年と 1849 年に輸出が急増した。その結果、第三期も年平均純輸出額が約 1 万 3500 ポンドとなった。こうした状況を考慮すれば、P.J. トーマスと B. ナタラジャンがデフレーションの要因として貴金属輸出を挙げたことは決して誤りではなかったのである。

(25) 中里成章「ベンガル藍一揆をめぐって (1) ——イギリス植民地主義とベンガル農民」、『東洋文化研究所紀要』83, 1981 年, 138~142 ページ; A.K. Bagchi, *The early years, 1806-1860 / The evolution of the State Bank of India: the roots, 1806-1876* (Oxford: Oxford University Press, 1984), pp.131-158.

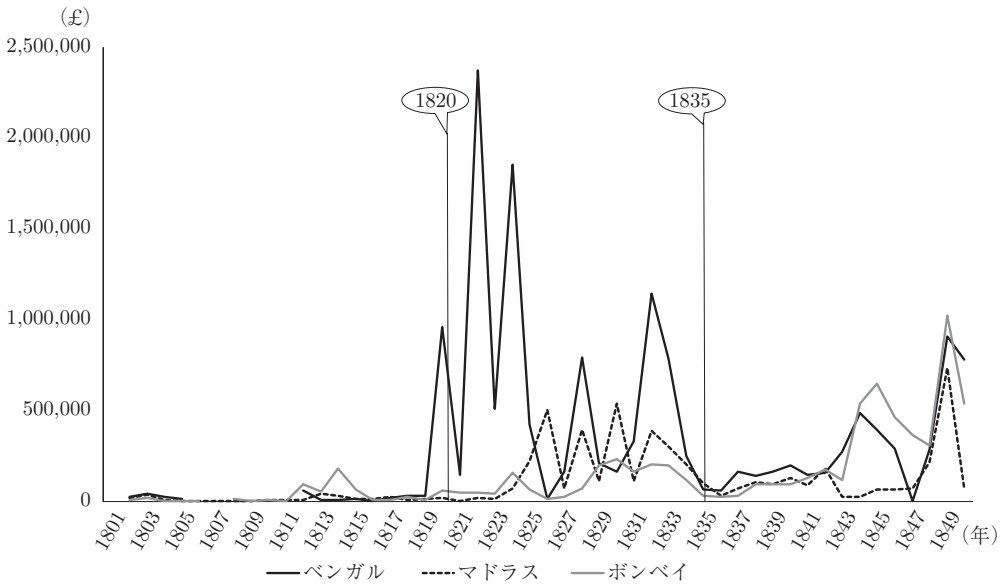
(26) C. Markovits “Bombay as a Business Centre in the Colonial Period: A Comparison with Calcutta” in Sujata Patel and Alice Thorner (eds.), *Bombay: Metaphor for Modern India* (Bombay: Oxford University Press, 1995), p.28

グラフ3 各管区における貴金属輸入：1801-1850年



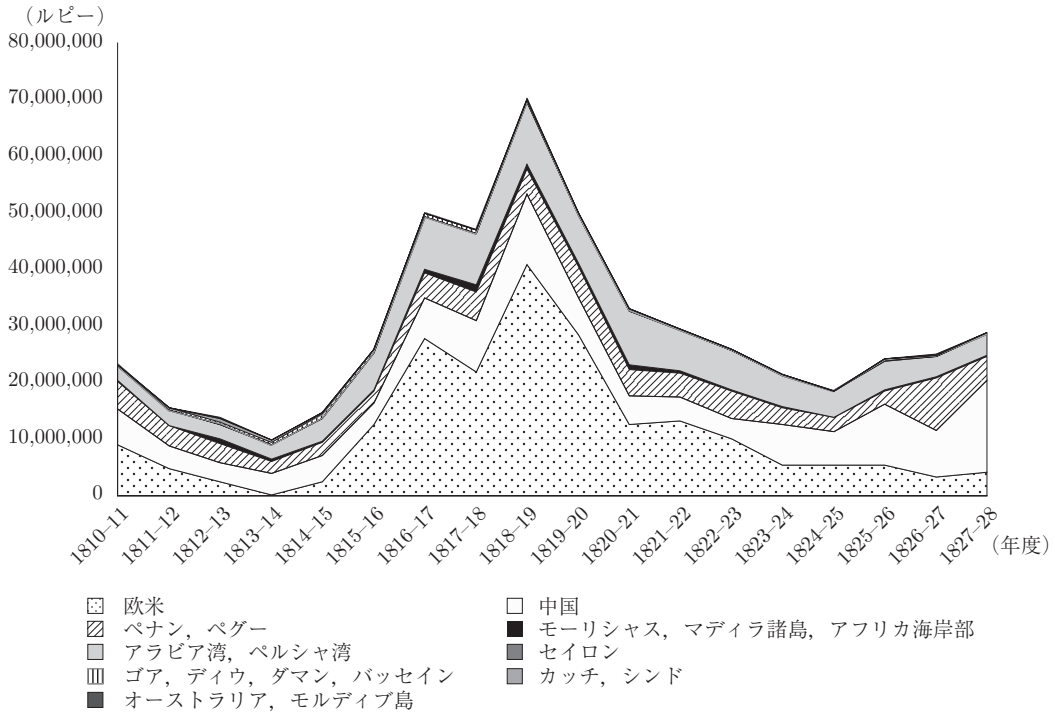
出典：表1から筆者作成。

グラフ4 各管区における貴金属輸出：1801-1850年



出典：表1から筆者作成。

グラフ5 インドにおける貴金属輸入の地域別取引額：1810-11～1827-28年度



出典：1831-32 (735-II) Report from the Select Committee on the Affairs of the East India Company; with minutes of evidence in six parts, and an appendix and index to each, B.P.P., pp.630-1, Appendix No.13 Statement of the Account of All treasure Imported into, Exported from, the Three Presidencies in India, respectively, in each Year, from 1810-11 to the latest Period; distinguishing Europe and America from China, the Eastern Lands, and other principal Places, exclusive of Shipments from Port to Port.

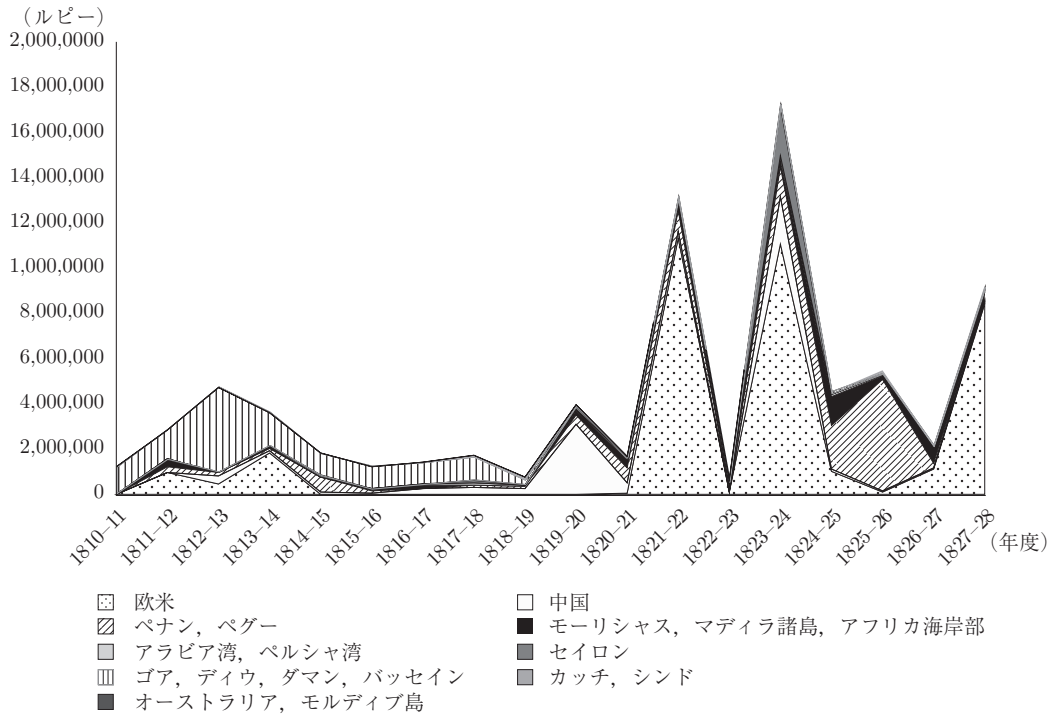
注1：ゴア、デイウ、ダマン、バッセインはインドのポルトガル植民地。
 2：カッチ王国は1819年に藩王国となり、シンド地方は1838年から1845年の間にイギリスの植民地となる。

2) 1810-11年度～1827-28年度間の貴金属貿易における地域別傾向

グラフ5, グラフ6はインドにおける地域別の貴金属輸出入を表している。貴金属輸入を見ると、欧米と中国が大きな割合を占めていたことは明らかで、両地域を合わせた比率は期間を通して平均で59%に達していた。だが、二地域の変動は対照的である。欧米の比率は1810-11年度の38%から1813-14年度の2%まで縮小し、その間年平均でも22%を占めるだけであった。その後輸入額が5000万ルピーを超える1816-17年度から1819-20年度には年平均54%まで拡大したが、前述したように、これは東インド会社のインド貿易独占廃止と第三次マラータ戦争によるものだろう。

(27) Gazetteer of the Bombay Presidency, Vol.5, Cutch, Palanpur and Mahi Kantha (Bombay: Government Central Press, 1880), p.162, p.197; Bayly, Indian Society, p.52.

グラフ 6 インドにおける貴金属輸出の地域別取引額：1810-11～1827-28 年度



出典：グラフ 5 と同じ。

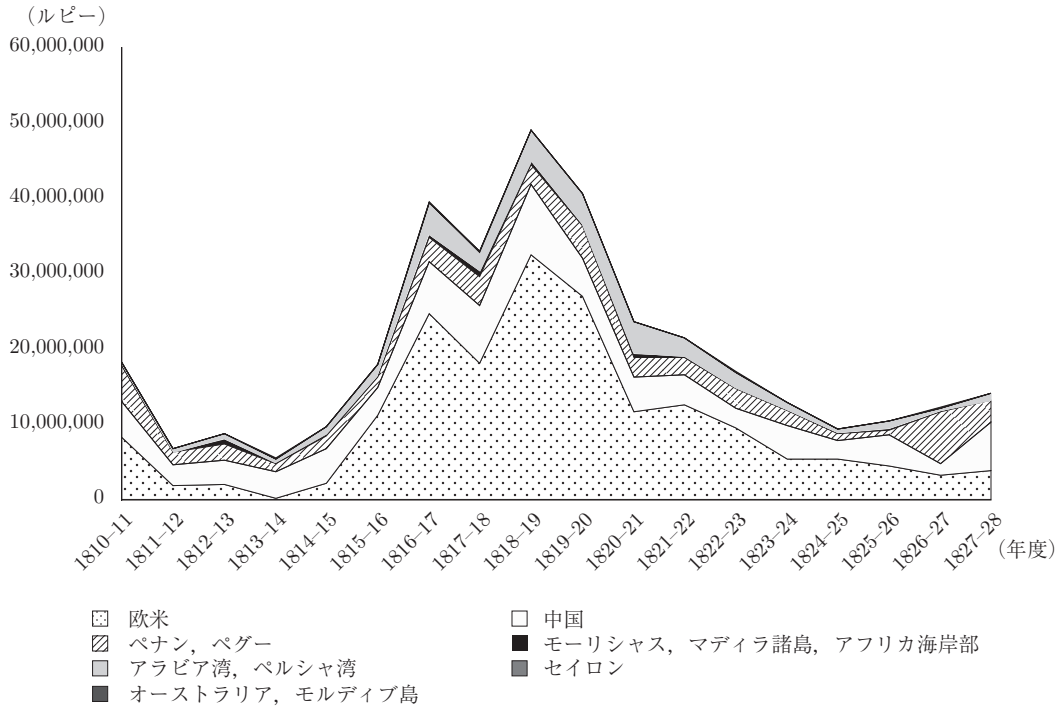
1820-21 年度以降、輸入額の減少と合わせて欧米の比率は急激に縮小していく。1820-21 年度から 1827-28 年度までで年平均 28 % とほぼ半減し、1827-28 年度には 14 % まで低下した。ここでもインド私貿易ブーム終焉と 1825 年恐慌の影響が明確に見て取れよう。

これに対して、中国は 1810-11 年度から 1814-15 年度までは年平均 30 % を占めていたものが、1815-16 年度以降 1822-23 年度まで年平均 15 % に縮小した。だが、1823-24 年度以降その比率は急速に拡大し年平均 40 % を占めるまでになり、1827-28 年度には 57 % までになった。K.N. チャウドゥリによれば、1814-15 年度には中国向け商品である棉花がインド輸出に占める割合は 8 % であったものが 1828-29 年度には 15 % に拡大し、アヘンも 1828-29 年度には 17 % を占めるようになった。こうした中国貿易の拡大が貴金属輸入にも大きな影響を与えたと考えられる。⁽²⁸⁾

もう一つ重要な点はベナン・バグーとアラビア湾・ペルシャ湾地域が常に一定の割合を占めており、数量も安定していたことである。両地域を合わせると、期間全体を通じて年平均 37 % を占め、最小値 22 % (1818-19 年度)、最大値 52 % (1826-27 年度) と欧米や中国と比べると変動も小さかった。欧米と中国の比率が大きく変動したことを考慮すれば、これらの地域は当時貴金属供給にとっ

(28) K.N. Chaudhuri, "Introduction", p.26.

グラフ7 ベンガルにおける貴金属輸入の地域別取引額：1810-11～1827-28年度



出典：グラフ5と同じ。

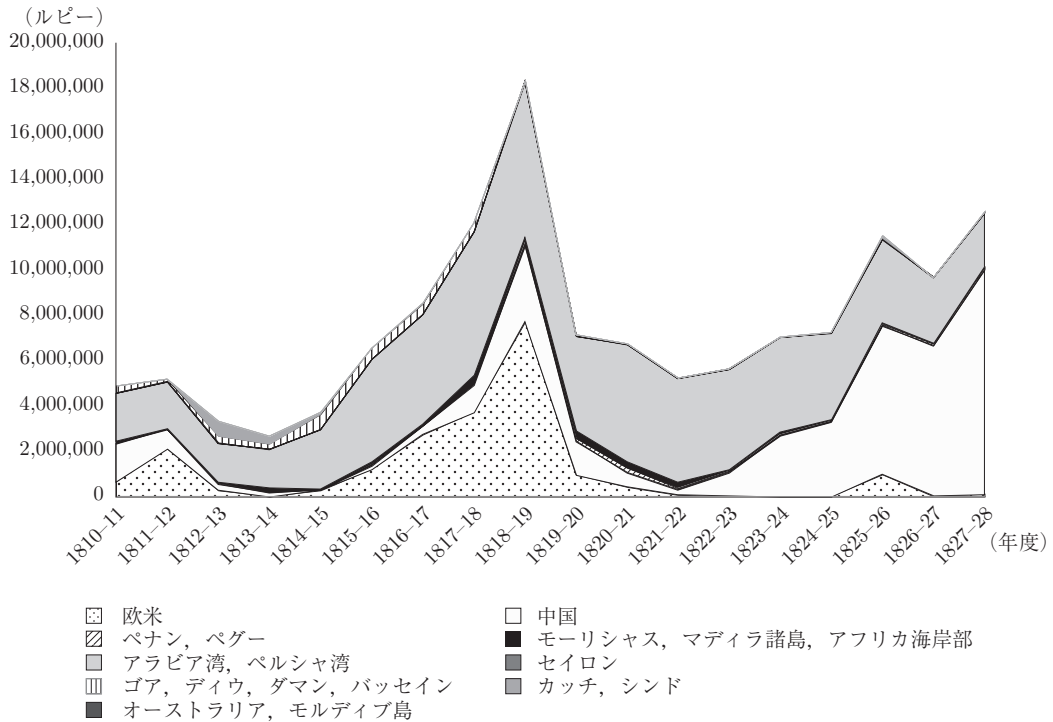
て重要な役割を果たしていたと考えられる。なお、1826-27年度にペナン・ペグーの比率が大きくなっているのは1824年から1826年まで続いた第一次イギリス・ビルマ戦争の賠償金である⁽²⁹⁾。

貴金属輸出について見ると、貴金属輸出額が小さい1810-11年度から1820-21年度まではアジア地域が年平均で84%を占めていたが、輸出が急増する1821-22年度以降欧米の比率が大幅に拡大した。輸出額が突出している1821-22年度、1823-24年度、1827-28年度にはそれぞれ86%、64%、92%に達しているが、これは、具体的にはイギリス向けであったとみなせるであろう。前述のように、K.N.チャウドゥリはインドの貿易黒字を利用した国際決済システムが30年代初頭に混乱をきたし、貴金属輸出が増加したと指摘しているが、こうした傾向は20年代にすでに見られた。他方で、1824-25年度、1825-26年度の二年間はペナン・ペグーへの比率が拡大しているが、前述した第一次イギリス・ビルマ戦争の戦費送金のためであろう。イギリスとの貴金属輸出入ばかりが論じられるが、19世紀前半の植民地獲得戦争との関連にも注意が必要である。

次に、各管区の傾向を見ていくことにしよう。まずは貴金属輸入についてである。グラフ7はベンガルにおける地域別の貴金属輸入を示しているが、インド全体の傾向と比べると欧米の比率がよ

(29) 根本敬『物語 ビルマの歴史 (中公新書)』(中央公論新社, 2014年), 57-59ページ。

グラフ 8 ボンベイにおける貴金属輸入の地域別取引額：1810-11～1827-28 年度

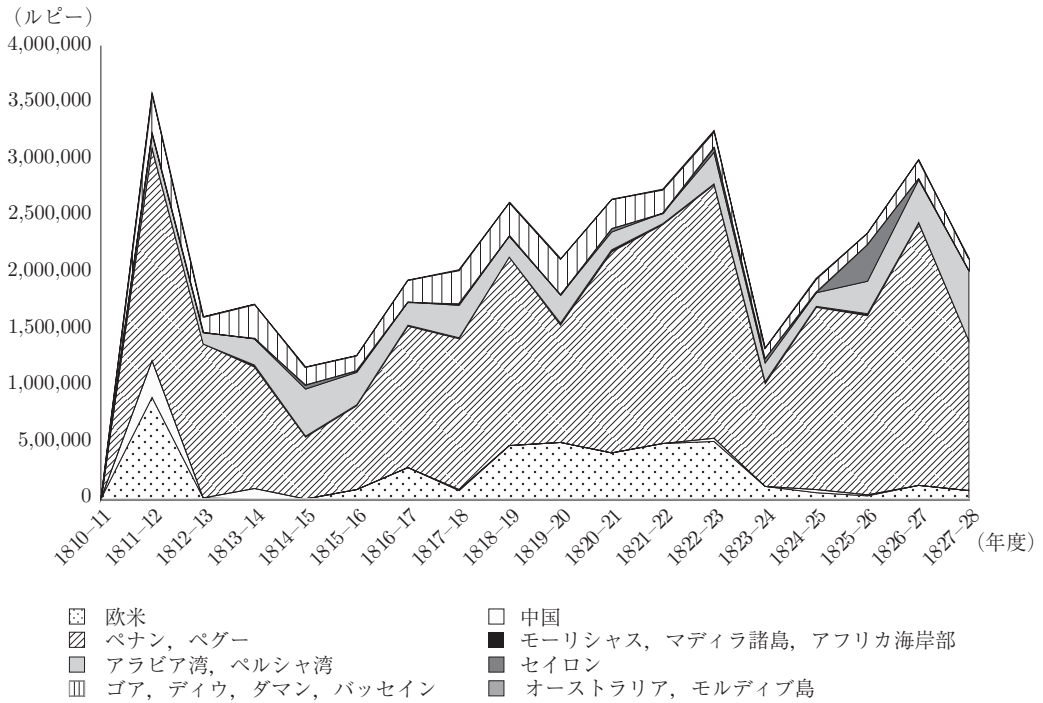


出典：グラフ 5 と同じ。

り高くなっている。欧米は 1814-15 年度までは年平均 24 %であったが、1815-16 年度から 1822-23 年度まで年平均 60 %と急増している。その後減少したが、1823-24 年度から 1827-28 年度の年平均比率は 39 %とインド全体のそれと比べても 10 %上回っていた。これはベンガルにおいて欧米との貿易がより大きな役割を担っていたことを示している。逆に、ペナン・ペグーとアラビア湾・ペルシャ湾地域を合わせた比率はインド全体と比べると小さいものになっており、期間全体で年平均 25 %と相対的にアジア諸地域との貿易が小さいことを示している。

グラフ 8 はボンベイにおける地域別の貴金属輸入を示している。ボンベイに関してまず重要なのは、アラビア湾・ペルシャ湾地域が常に大きな比重を占めていた点である。期間を通しては 54 %であったが、欧米からの輸入がほとんどなくなっていく 1820-21 年度から 1822-23 年度の 3 年間は 80 %程度を占めるまでになっていた。これは、19 世紀第一四半期にアラビア湾・ペルシャ湾地域がボンベイにとって重要な貴金属供給地域であり、かつ重要な貿易相手地域であったことを示している。次に、他の二管区と異なり 1821-22 年度以降輸入額が再び増加し、かつ中国の比率が急速に拡大した点である。1821-22 年度にはわずか 4 %であったものが、1827-28 年度には 80 %まで拡大した。1830 年代からの中国向けアヘン・棉花貿易の拡大は広く知られているが、そうした傾向は

グラフ9 マドラスにおける貴金属輸入の地域別取引額：1810-11～1827-28年度



出典：グラフ5と同じ。

1820年代半ばから始まったと考えられよう。⁽³⁰⁾

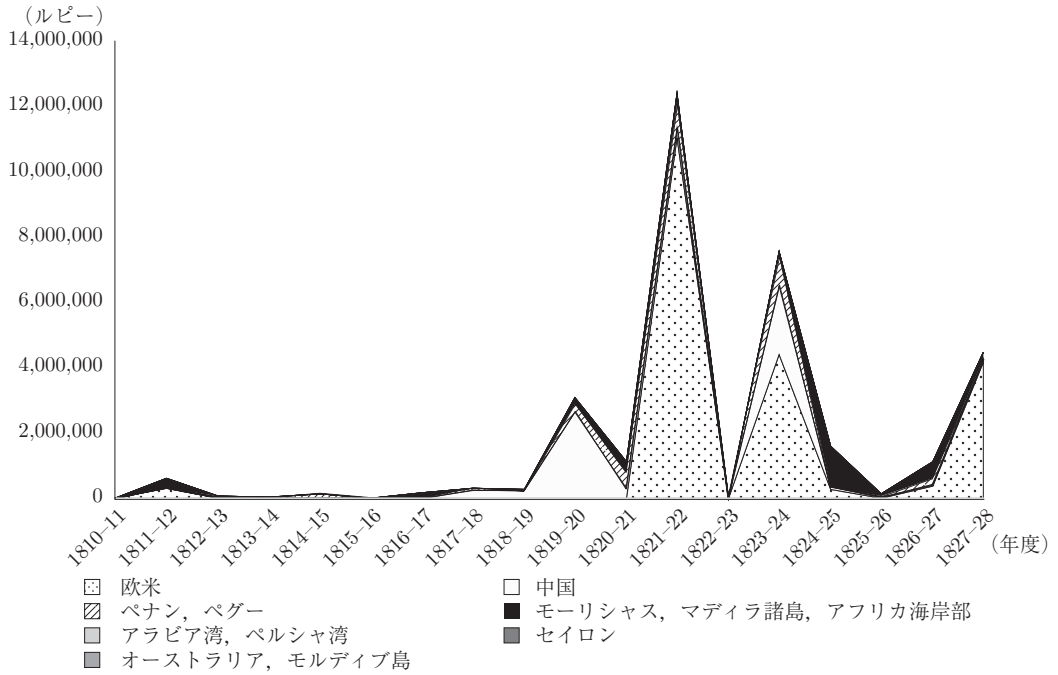
マドラスの地域別輸入を見ると（グラフ9）、ベナン・ペグーが重要な貴金属供給地であることが明らかとなる。期間全体で年平均65%を占めており、1822-23年度、1824-25年度、1826-27年度には70%を超え、1822-23年度と1826-27年度には約200万ルピーを超えていた。

次に、各管区の地域別貴金属輸出を見ると（グラフ10、グラフ11、グラフ12）、輸入と異なり、三管区に共通性が見られる。それは、1821-22年度以降欧米への輸出が額、比率とも大幅に増加した点である。ベンガルでは1821-22年度と1827-28年度には90%を占め、1823-24年度も58%に達し⁽³¹⁾ていた。ボンベイでは1823-24年度、1824-25年度、1827-28年度の3ヶ月で65%を超えた。マドラスでも1823-24年度には70%近くに達し、1826-27年度、1827-28年度には90%までを占めるほどになっていた。前述したように、1819-20年度から急激に輸入が減少したベンガルや19世紀前半を通じて輸入額が少ないマドラスでは、短期的で多額のイギリス向け輸出は貴金属需要に大き

(30) Markovits “Bombay as a Business Centre in the Colonial Period”, pp.28-30.

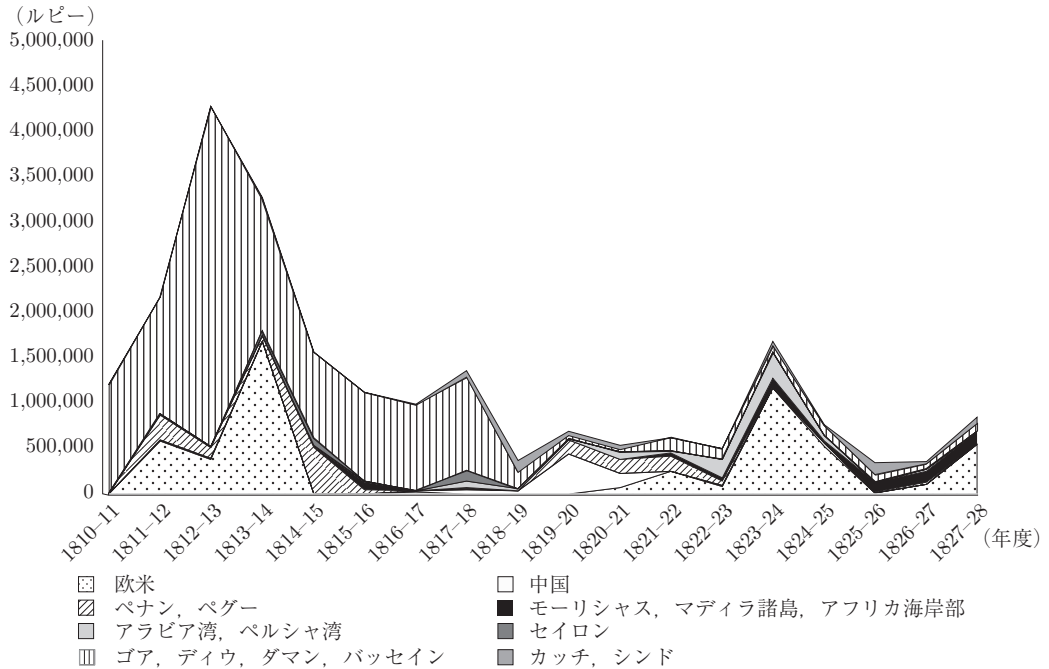
(31) バグチはビルマ戦争による貨幣不足を指摘しているが、ベナン・ペグーへの輸出額は最高で1823-24年度の90万ルピー、比率は12%に過ぎなかった；Bagchi, *The Evolution of the State Bank of India: the roots, 1806-1876*, p.134.

グラフ 10 ベンガルにおける貴金属輸出の地域別取引額：1810-11～1827-28 年度



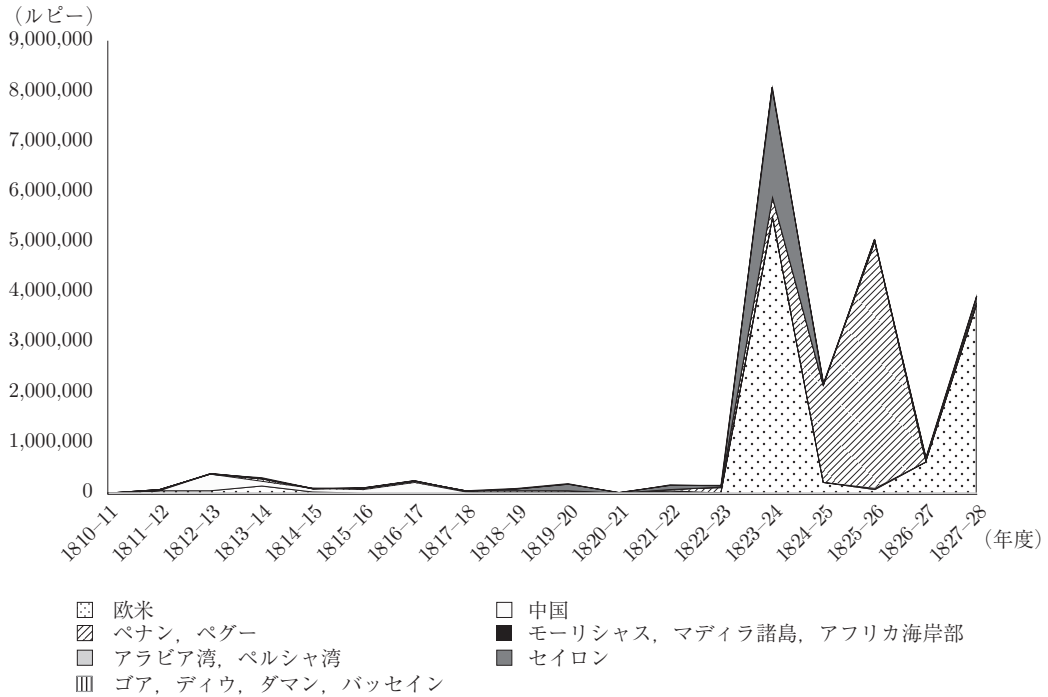
出典：グラフ 5 と同じ。

グラフ 11 ボンベイにおける貴金属輸出の地域別取引額：1810-11～1827-28 年度



出典：グラフ 5 と同じ。

グラフ 12 マドラスにおける貴金属輸出の地域別取引額：1810-11～1827-28 年度



出典：表 2 から作成。

な影響を与えたであろう。それまでイギリスとの貴金属貿易が盛んでなかったマドラスでさえ、多額の輸出が行われたことから見て、1820年代の貴金属輸出は三管区全体の現象であったことも明らかとなった。他方で、ボンベイは1810-11年度から1818-19年度までゴア・デイウ・ダマン・パッセインといったポルトガル領植民地に多額の貴金属輸出を行っていたが、これはクローブ輸入によるものだと考えられる。1828-29年度でも10万7755ルピーのクローブがボンベイに輸入されていた⁽³²⁾。

3. 19世紀前半の東インド会社による貨幣鑄造

1) インドにおける貨幣鑄造額

表2、グラフ13はインドにおける貨幣鑄造額を表している。これによると、第一期と第二期の傾向は貴金属輸入のそれとほぼ等しくなっている。表2によると、第一期では、第二次マラータ戦争

(32) 1831 (320C) Appendix to the report on the affairs of the East India Company. III. External and internal commerce of Bengal, Madras, and Bombay, B.P.P., pp.155-156.

表2 インドにおける貨幣鑄造額：1801-1850年

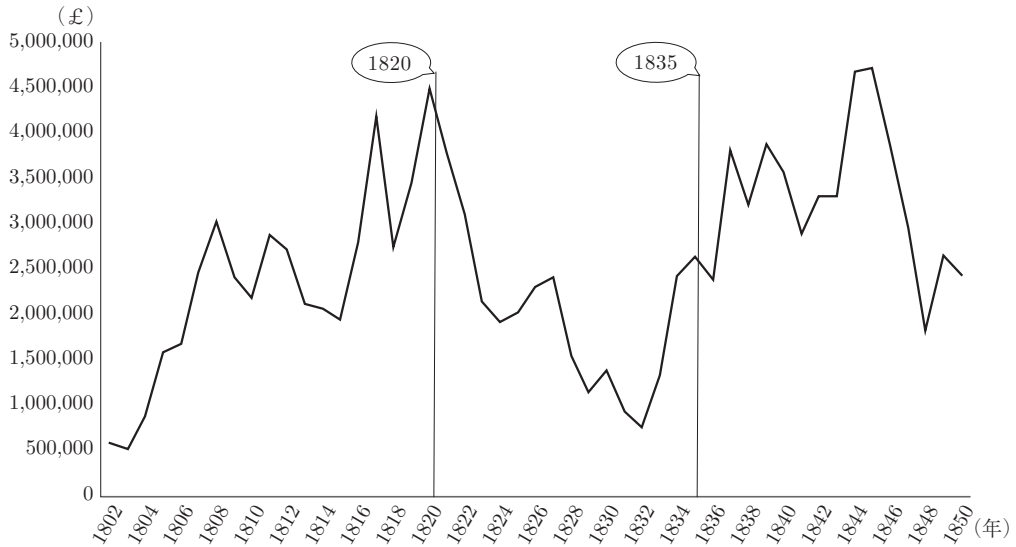
(£)

年	ベンガル			マドラス*			ボンベイ			総額
	金貨	銀貨	合計	金貨	銀貨	合計	金貨	銀貨	合計	
1801										
1802	8,314	307,323	315,637				229,174	37,998	267,172	582,809
1803	12,785	466,474	479,259				22,765	11,400	34,165	513,424
1804	8,950	774,167	783,117				72,554	24,423	96,977	880,094
1805	12,694	1,269,620	1,282,314				208,338	100,357	308,695	1,591,009
1806	13,045	1,619,654	1,632,699				26,566	27,765	54,331	1,687,030
1807	9,177	2,171,495	2,180,672				70,667	212,623	283,290	2,463,962
1808	23,175	2,177,355	2,200,530	85,758	449,012	534,770	73,857	219,963	293,820	3,029,120
1809	5,080	1,759,308	1,764,388	85,757	449,012	534,769	19,001	93,179	112,180	2,411,337
1810	3,189	1,545,280	1,548,469	226,800	339,850	566,650	22,039	56,814	78,853	2,193,972
1811	102,966	1,866,260	1,969,226	226,800	339,849	566,649	155,590	191,056	346,646	2,882,521
1812	185,470	1,298,661	1,484,131	130,736	239,074	369,810	341,216	528,188	869,404	2,723,345
1813	125,632	1,330,466	1,456,098	130,736	239,074	369,810	239,396	61,189	300,585	2,126,493
1814	109,185	1,188,249	1,297,434	86,713	229,675	316,388	305,064	152,950	458,014	2,071,836
1815	150,196	1,482,420	1,632,616	86,713	229,675	316,388				0
1816	93,599	2,280,706	2,374,305	86,713	229,675	316,388	94,989	17,548	112,537	2,803,230
1817	136,320	3,599,003	3,735,323	86,713	229,675	316,388	81,191	51,119	132,310	4,184,021
1818	156,728	1,935,879	2,092,607	285,312	371,133	656,446				0
1819	36,310	2,627,669	2,663,979	285,312	371,133	656,446	100,758	34,513	135,271	3,455,696
1820	53,767	3,435,427	3,489,194	285,313	371,134	656,447	107,032	238,645	345,677	4,491,318
1821	82,605	2,814,993	2,897,598			895,325				0
1822	49,633	2,132,513	2,182,146			920,825				0
1823	27,921	1,269,738	1,297,659			849,250	36	2,433	2,469	2,149,378
1824	12,651	918,084	930,735			995,950				0
1825	297,295	1,050,628	1,347,923			682,900				0
1826	336,502	1,503,191	1,839,693			465,900				0
1827	342,683	1,613,061	1,955,744			464,025				0
1828	47,962	1,166,450	1,214,412			331,400				0
1829	50,130	822,125	872,255			269,600				0
1830	102,403	1,068,616	1,171,019			222,350				0
1831	175,890	474,241	650,131			286,301				0
1832	196,202	477,624	673,826			800				0
1833	252,909	820,318	1,073,227			255,540				0
1834	264,859	1,234,756	1,499,615	395,880	431,150	827,030	108,316	108,316	216,632	2,434,961
1835	168,484	1,331,005	1,499,489	287,520	352,100	639,620	507,529	507,529	1,015,058	2,646,638
1836	119,734	1,624,996	1,744,730			0	643,476	643,476	1,286,952	2,388,206
1837	6,815	2,981,430	2,988,245			0	827,188	827,188	1,654,376	3,815,433
1838	25,426	2,093,410	2,118,836			0	1,094,864	1,094,864	2,199,728	3,213,700
1839	34,471	2,676,374	2,710,845			0	1,177,282	1,177,282	2,354,564	3,888,127
1840	79,156	2,512,631	2,591,787			0	982,890	982,890	1,965,780	3,574,677
1841	56,772	1,641,069	1,697,841			0	1,203,824	1,203,824	2,907,665	2,901,665
1842	23,101	2,512,631	2,535,732			258,598	517,533	517,533	1,035,066	3,311,863
1843		2,061,186	2,061,186			164,020	1,079,567	1,079,567	1,243,587	3,304,773
1844	16,634	2,176,608	2,193,242			422,846	2,073,250	2,073,250	4,266,492	4,689,338
1845	17,976	2,833,560	2,851,536	8,360	317,243	325,603	1,546,018	1,546,018	3,437,631	4,723,157
1846	15,454	2,253,233	2,268,687	10,054	223,229	233,283	3,639	1,366,081	1,369,720	3,871,690
1847	42,733	1,647,812	1,690,545			608,401	664,696	664,696	1,329,392	2,963,642
1848	16,293	1,011,994	1,028,287	30,000	349,530	379,530	420,736	420,736	841,472	1,828,553
1849	70,470	1,330,327	1,400,797			129,668	1,119,270	1,119,270	1,248,938	2,649,735
1850	32,452	1,359,712	1,392,164			86,437	965,055	965,055	1,957,212	2,443,656

出典：1864 (133) *East India (bullion)*, B.P.P., pp.2-3.

* 1808年から1820年の間、マドラスのデータは2~4年間の合計という形で記載されている。ここでは、平均した値を示している。

グラフ 13 インドにおける貨幣鑄造額：1801–1850 年



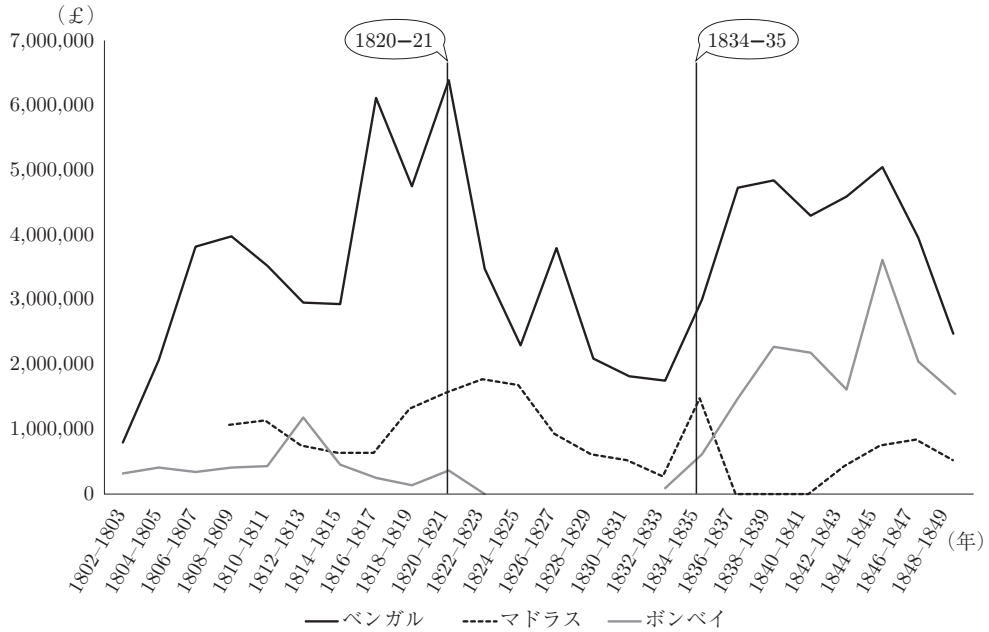
出典：表 2 から筆者作成。

により 1808 年の約 300 万ポンドまで急増したのち 1815 年まで増減を繰り返した。その後再び急増し、1820 年の約 450 万ルピーまで達した。だが、第二期に入り鑄造額は急速に減少し、1832 年には約 75 万ルピーと 1820 年の 6 分の 1 までになった。第三期は貴金属輸入と同様に増加していったが、その程度は貴金属輸入よりもはるかに大きいものであった。1845 年には約 470 万ルピーと 1820 年を超えるほどであったが、これは 1835 年の貨幣統一条例に伴う大量の新銀貨鑄造が行われたためだと考えられよう。

次に、各管区の貨幣鑄造額の傾向を見ることとしよう（グラフ 14、グラフ 15、グラフ 16）。貴金属貿易同様、ベンガルはインド全体と同じような傾向を示しているが、ボンベイ・マドラスでは異なった傾向が見て取れる。ベンガルでは 1811 年から 20 年まで年平均約 222 万ポンド、1836 年から 45 年まで年平均 235 万ポンドと第三期のほうが鑄造額は大きくなっている。前述したように、新銀貨の大量供給が行われたと言えるだろう。ボンベイは第二期のデータが欠けているが、1834 年の 10 万 8316 ポンドから 1835 年の 50 万 7529 ポンドに急増していることから、ここでも第三期に新銀貨の大量鑄造が行われたと考えられる。第一期の 1811 年から 1820 年までの年平均鑄造額が約 27 万ポンドであったのに対し、第三期の 1844 年には最大鑄造額の 207 万 3250 ポンドに達し、1836 年から 1845 年まで年平均約 110 万ポンドとベンガルと比べるとその増加分ははるかに大きかった。

だが、マドラスでは新銀貨の大量鑄造額が生じず、逆に第一期の 1818 年から第二期の 1825 年まで鑄造額が増加し、年平均約 80 万ポンドであった。これは 1818 年にマドラス管区内での統一銀貨

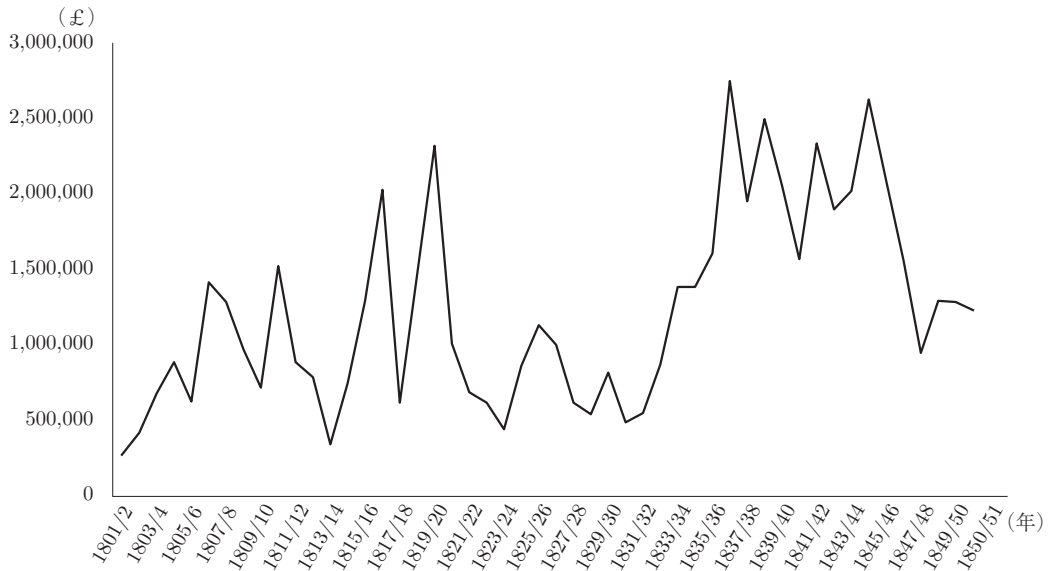
グラフ 14* インド三管区における貨幣鑄造額：1802-1849 年



出典：表 2 から筆者作成。

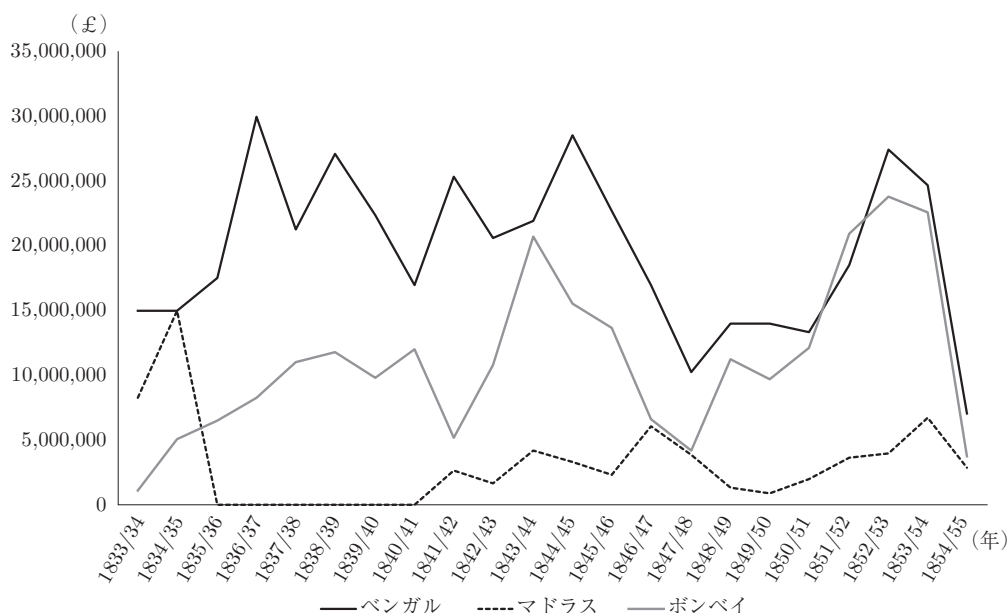
*マドラスの項目に複数年の合算で表示されている箇所があるため、1802 年から 2 ヶ年ごとの合計で表している。

グラフ 15 ベンガルにおける貨幣鑄造額：1801/02-1850/51 年



出典：Prinsep, *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic*, Vol.2, pp.80-81.

グラフ 16 インド三管区における貨幣鑄造額：1833/34-1854/55（年）



出典：Prinsep, *Essays on Indian Antiquities, Historic, Numismatic, and Palæographic*, Vol.2, p.81.

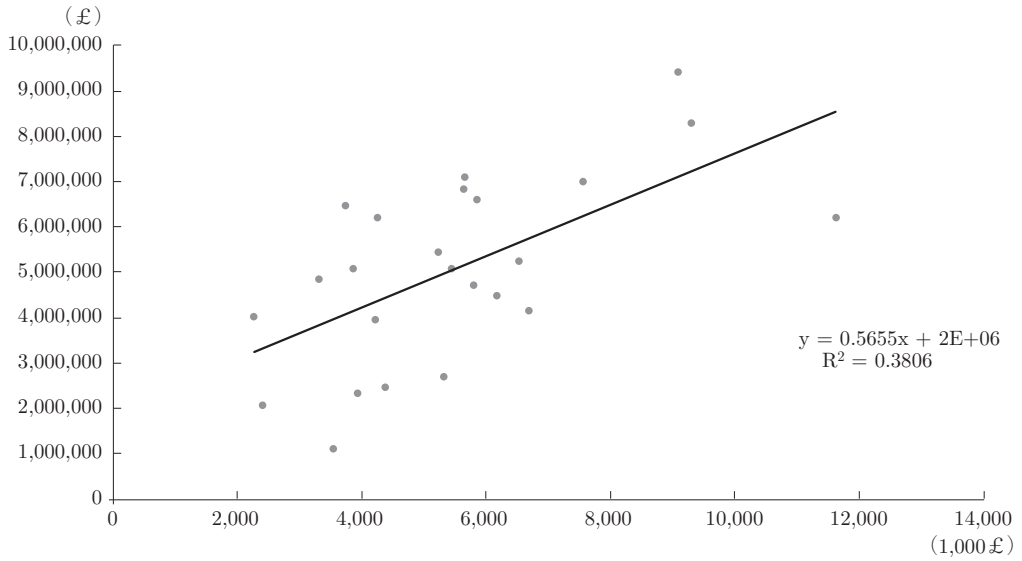
マドラス・ルピーの導入が決定したことが大きな要因であろう。このマドラス・ルピーがその後の会社ルピーの基準になったことから、マドラスではベンガルやボンベイより早くに新銀貨の大量鑄造が行われたと考えられる⁽³³⁾。だが、第三期に入った直後の1863年から六年間鑄造所が閉鎖されてしまい、再開後も鑄造額は大きく増えず、1842年から1850年まで年平均約29万ポンドでしかなかった。ベンガルとボンベイと異なり、P.J. トーマスとB. ナタラジャンが指摘した新銀貨の供給不足は、マドラスでは生じていたと言えるだろう。

2) 貴金属貿易と貨幣鑄造額の関係

当該期の貴金属貿易と貨幣鑄造額の間にはどのような関係があったのだろうか。1802年から1849年までの貴金属輸入と貨幣鑄造額の相関を算出したのが、グラフ17からグラフ20である。これらを見ると、いずれも相関係数の2乗（グラフでは R^2 ）が0.36から0.42の間にあることから相関係数は0.6から0.65となり、インド全体も各管区もある程度の相関があることが明らかとなった。だが、輸出額と貨幣鑄造額の関係はボンベイ以外では相関は見られなかった。インドでは、ムガル帝国期から鑄造所が貿易港や内陸の貿易中継地に作られ、域外から流入した貴金属が貨幣鑄造の重要な原材料とされてきた。19世紀前半においても、輸入された貴金属のかなりの部分が貨幣鑄造に向

(33) Ambirajan, *Political Economy and Monetary Management*, pp.22-37.

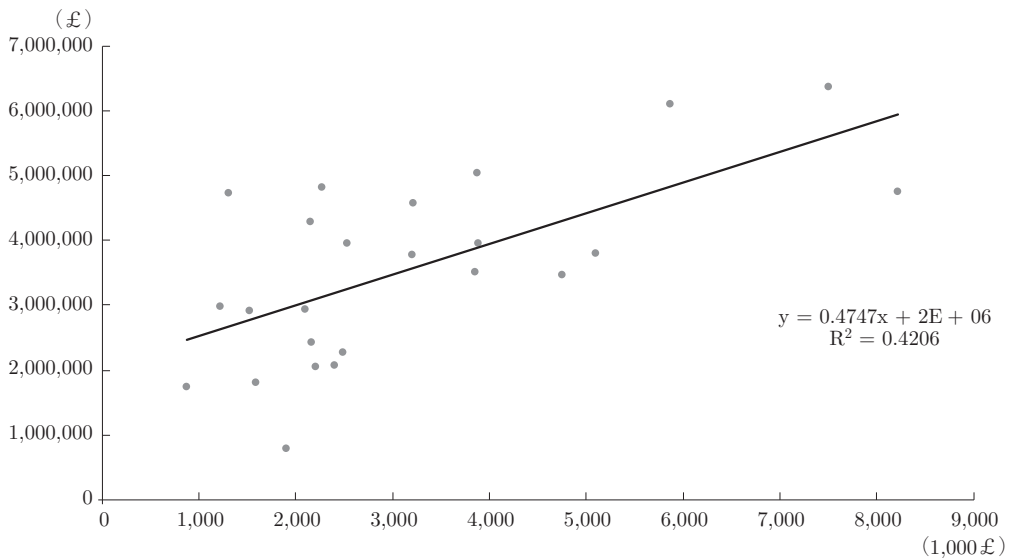
グラフ 17* インドにおける貴金属輸入額と貨幣鑄造額の相関関係：1802-1849 年



出典：表 1，表 2 より筆者作成。

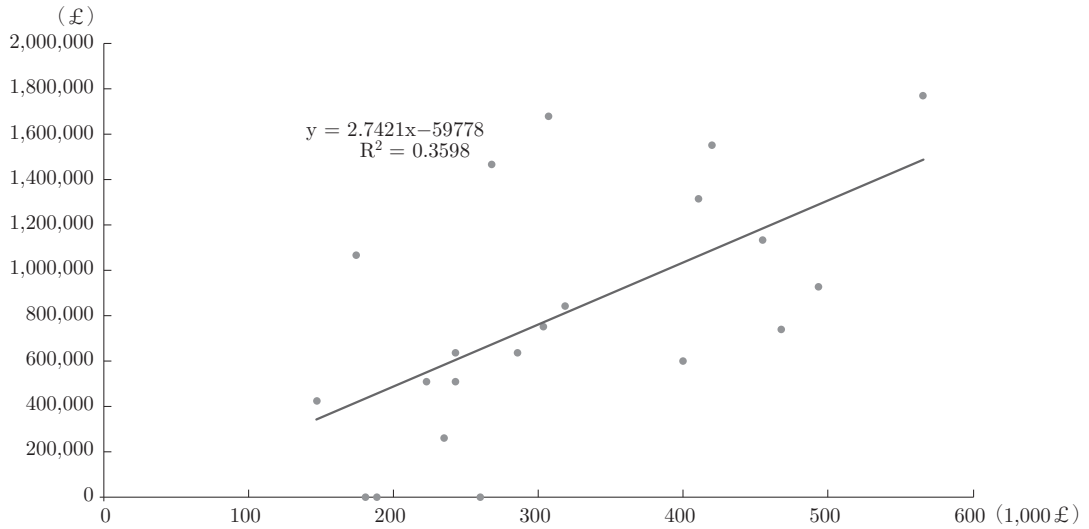
* 鑄造額のマドラスの項目に複数年の合算で表示されている箇所があるため，各データを 1802 年から 2 ヶ年ごとの合計に加工して算出。以下，グラフ 18，19，20 も同様。

グラフ 18 ベンガルにおける貴金属輸入額と貨幣鑄造額の相関関係：1802-1849 年



出典：表 1，表 2 より筆者作成。

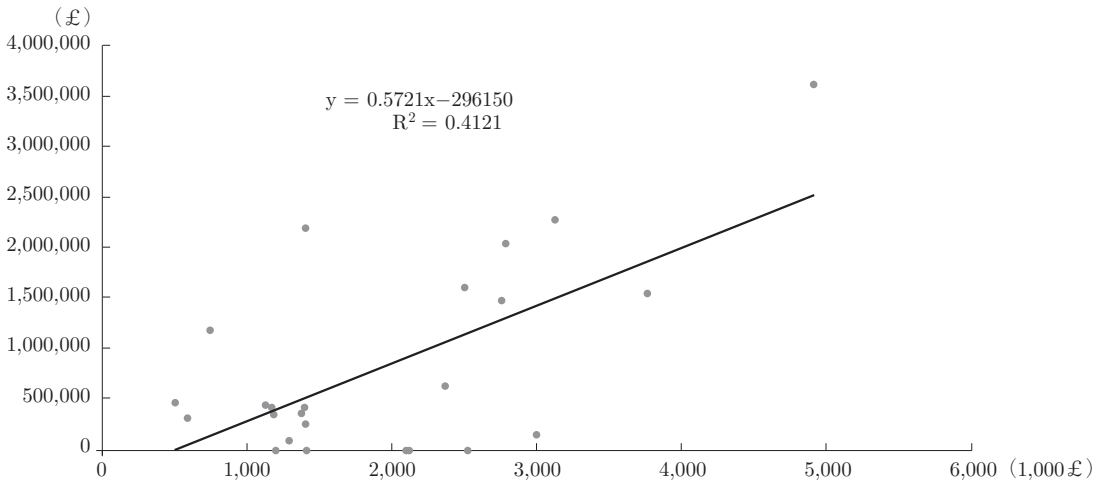
グラフ 19* マドラスにおける貴金属輸入額と貨幣鋳造額の相関関係：1808-1849 年



出典：表 1, 表 2 より筆者作成。

*マドラスのデータは 1801 年から 1807 年まで数値がないことから、1808 年から 1849 年までで算出。

グラフ 20 ボンベイにおける貴金属輸入額と貨幣鋳造額の相関関係：1808-1849 年



出典：表 1, 表 2 より筆者作成。

けられたと考えられる。⁽³⁴⁾

4. 結語

19世紀前半の貴金属貿易の傾向は三つの時期で変化した。第一期では貴金属輸入は増加傾向である一方、輸出はほとんど行われていなかった。1814年から1819年まで輸入は急増したが、これは東インド会社のインド貿易独占廃止と第三次マラータ戦争によるものであろう。だが、第二期では輸入は急減する一方、輸出は大幅に増加した。ここから、この時期に貴金属不足が発生していたと考えられる。要因としては、私貿易ブーム終焉による投資の引き上げと1825年恐慌に起因するイギリス商品輸出の減少による貿易黒字の減少などが挙げられよう。第三期には再び輸入は増加し輸出は減少したが、1845年を境に再び輸入急減、輸出急増となった。これは1847年恐慌の影響が大きいであろう。1821年から1835年の貴金属不足は、通説とは異なり貴金属輸入の急減によってもたらされたと考えられる。この時期に貴金属輸出も増加したが、輸入減少ははるかに程度が大きいものであり、輸出が輸入を上回ったのもわずかに二年だけであった。

各管区の貴金属貿易の傾向を見ると、それぞれが異なる状況に置かれていたことが明らかとなる。ベンガルでは1820年から1830年代前半と1845年以降に貴金属不足となっていたが、それぞれの時期に深刻な信用危機が生じていた。他方、ボンベイでは常に輸入が輸出を上回り、不足の程度はより緩やかであったが、マドラスでは19世紀前半を通して貴金属輸入額が少なかったため、輸出が増加した1820年半ば以降慢性的に貴金属不足に陥っていた。

1810-11年度から1827-28年度までの貴金属貿易の地域別傾向を見ると、東インド会社やイギリス私貿易商が中心的役割を果たしていた欧米・中国と他のアジア地域で明確な相違が存在した。貴金属輸入では欧米と中国を合わせた比率が非常に高かったが、それぞれの傾向は対照的であった。欧米の比率は1810年代後半に増加したが、1820年代に入ると急減した。他方、中国の比率は1820年代後半に拡大した。欧米と中国の比率が変動する中、ペナン・バグーとアラビア湾・ペルシャ湾地域からの輸入は安定しており、両地域を合わせた比率は期間を通じて平均比率37%となっていた。

貴金属輸出では、輸出額が少なかった1810年代においては中国を含むアジア地域が大半を占めていたが、1820年代に入ると急増した輸出額の大半を欧米が占めるようになった。明らかに、これはイギリス向けであり、1820年代にはすでにインドの商品輸出貿易と国際決済システムに大きな問題が存在していたことを示唆している。他方で、アジア地域への輸出減少は商品輸出貿易が縮小した可能性を示している。つまり、1820年代にインド貿易構造に大きな変化が生じていたということであろう。

(34) 谷口謙次「近世南アジアの貨幣制度と18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性」、312～315ページ。

各管区の地域別傾向では、貴金属輸入と輸出に大きな相違が存在した。貴金属輸入に関しては、管区ごとに異なる特徴を有していた。ベンガルでは欧米が占める比率がインド全体のそれより10%も上回り、逆にペナン・ペグーとアラビア湾・ペルシャ湾地域を合わせた比率がインド全体のそれより10%以上も下回っていた。ベンガルは他の管区と比較して、貴金属供給に関して欧米への依存度が高かったことを示している。それに対して、ボンベイとマドラスはアジア地域からの貴金属供給が大きな比率を占めていた。ボンベイではアラビア湾・ペルシャ湾地域と1820年代に入ってから中国が重要な供給地であり、マドラスではペナン・ペグーがその役割を果たしていた。

しかし、貴金属輸出では三管区に1821-22年度以降欧米への輸出が大幅に増加したという共通点が存在した。特に、いずれの管区でも1823-24年度と1827-28年度に大規模な輸出が行われているが、前半は私貿易ブーム終焉の、後半は1825年恐慌の影響によるものであろう。他の二管区と異なり、ベンガルでは1821-22年度にも輸出が行われているが、私貿易ブーム終焉による資本引き上げがいち早く生じたと考えるべきである。

貨幣鑄造額の傾向は第一期と第二期には貴金属貿易のそれとほぼ同様であったが、第三期になると第一期を上回る鑄造が行われたことが明らかとなった。これは1835年の貨幣統一条例に対応して大量鑄造が行われたことを示している。各管区を見ると、ベンガルはインド全体とほぼ同じ傾向を取る一方、ボンベイは第一期の鑄造額が少なく第三期に大規模な貨幣鑄造が行われた。マドラスは第一期の末期から第二期の前半に比較的多くの鑄造が行われたが、その後の鑄造額は非常に少なかった。これらの結果から貴金属貿易額と貨幣鑄造額の関係を分析すると、貴金属輸出と貨幣統一条例の影響を指摘する通説とは異なり、貴金属輸入額と鑄造額にある程度の相関が存在することが明らかとなった。

以上の分析から19世紀の第2四半期にデフレーションが生じていたと結論付けて良いのだろうか。次の二点について今後の課題も含めて論じることとしよう。第一に、デフレーションを否定する議論があることである。すでに見たように、A.S.M.A. フセインやR. ステュダーは19世紀前半の穀物価格は比較的安定していたと論じたが、表3を見ても16商品中10商品の価格が上昇しており、コメや小麦といった穀物価格の上昇も確認できる。貨幣不足が生じていた中、どうして価格の安定や価格上昇が生じたのだろうか。

これを理解するには、貨幣の多様性が貨幣不足を緩和していた可能性を考える必要がある。18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性と市場圏との関係についてはすでに述べたが、19世紀前半のインド全土についても貨幣の多様性が依然存続していたと考えられる。東インド会社やヨーロッパ商人が使用するのは高品位銀貨であったため、イギリスの統計に残る貨幣鑄造額は高品位銀貨であり、地方で流通する低品位銀貨は表れてこなかった。すでに見たように、会社ルピーを含む高品位銀貨の供給は東インド会社が管理する鑄造所で鑄造されるため、貴金属輸入の変動に大きく左右された。しかし、低品位銀貨は地方の鑄造所で鑄造されたり、過去に鑄造された銀貨が転用されたり

表3 カルカッタにおける輸出品価格

(ルピー, アナ)

商品 *1	1815 年	1831 年	増加率 (%)	減少率 (%)
棉花	11, 12	9, 10		-18
ショウガ	5, 8	6, 2	11	
コメ	1, 9	1, 15	24	
小麦	1	1,7	43	
ベニバナ	24, 4	48, 8	100	
袋用麻布ズック, キャンパス	5, 12	8, 8	47	
ラック染料	79, 2	26		-67
シェラック	23, 3	29,8	27	
硝石	4, 8	7, 6	63	
砂糖	9, 15	8, 6		-15
タマリンド	1, 10	1, 14	15	
ウコン	2, 11	2, 7		-9
材木	19, 6	19, 11	1	
Allahabad Mahmoodies*2	96	47, 8		-50
Luckipore Baftoes*2	58	85	46	
生糸	140	117, 8		-16

出典: 1831-32 (735-II) Report from the Select Committee on the Affairs of the East India Company; with minutes of evidence in six parts, and an appendix and index to each, B.P.P., p.514.

*1 価格は棉花からウコンまで重量単位で表示。材木から個数単位で表示。

*2 共に商品は不明。

するため、その供給は地方に存在する貴金属ストックに依存する。つまり、1820年代から30年代半ばの貨幣不足の影響を大きく受けたのは、ヨーロッパ商人や大商人中心の都市やプランテーションであり、地方経済は影響を受けていない可能性が高かった。小谷汪之も南グジャラートの事例から19世紀前半の農村経済が国際貿易や国際市場とは切り離されていたと論じている⁽³⁵⁾。本論文で明らかになった貴金属貿易や貨幣鑄造の傾向がインド経済に与えた影響を論じるには、19世紀前半のインド経済の構造や貨幣状況をより明確にする必要があるだろう。だが、19世紀前半の貨幣の多様性や多様な市場圏については依然十分に研究が進んでいない。19世紀前半のインドにおける貴金属ストックの状況や貨幣の多様性に関する研究もほとんど見られない。また、R. ステュダーは19世紀後半まで地域間の穀物価格の相関が見られないことから、18世紀から19世紀前半のインド経済の統合はムガル帝国の崩壊によって大きく後退し、イギリスの支配によって市場再統合が進んでいったと論じている⁽³⁶⁾。彼が主張するように、19世紀後半に多様な市場は失われたと言えるのか、さらなる研究が必要であろう。

(35) 小谷汪之「国際商品市場とインド経済 2. 植民地支配下におけるインド社会の変容」(辛島昇編『新版世界各国史 南アジア史』, 山川出版社, 2004年) 305~307ページ。

(36) Studer "India and the Great Divergence", pp.418-423.

表4 ロンドンにおける世界商品価格：1793–1831年

(シリング, ペンス)

商品*	1793年	1815年	1831年	増加率 (%)	減少率 (%)
棉花	1, 3/4	—, 11 1/2	—, 5	-9	-56
藍	7, 4 1/2	8, 10	4, —	9	-51
コメ	None	23, 9	14, 10	—	-39
硝石	59, 9	87, —	36, —	45	-58
生糸	21, —	18, 1	13, 7 1/2	-13	-24
シナモン	12, —	13, 8	8, 9	13	-35
胡椒	1, 2 1/2	—, 10 1/2	—, 3 3/4	-27	-64
砂糖	66, 6	49, 1	26, 2	-26	-46

出典：1831–32 (735-II) *Report from the Select Committee on the Affairs of the East India Company; with minutes of evidence in six parts, and an appendix and index to each*, B.P.P., p.514.

*価格は重量単位ごとに表示。

第二に、貴金属輸入とそれに伴う貨幣不足は当時の世界経済の影響によって生じていたという議論である。例えば、渡辺健一は当該期に国際商品の価格下落が生じていたと論じているが、表4もロンドンでの同様の傾向を表している⁽³⁷⁾。実際、1830年代初頭のカルカッタ信用危機の要因は1820年代後半のロンドン市場における藍価格低迷にあったと中里成章は論じている。グローバルな視点として、大橋厚子は銀不足が19世紀前半に世界全体で生じており、その要因としてアジアを中心とする植民地での貨幣経済化による銀需要の増加を論じている。大橋が指摘するように、19世紀前半インドの貨幣供給（貴金属貿易と貨幣鑄造）の問題は本論文で触れた国内不況だけでなく、イギリスや中国、アメリカや東南アジアなどの経済変動や貿易構造、国際決済システムの問題とも大きな関係を持っているであろう。今挙げた諸地域における貴金属貿易とそれに関わる経済不況や貿易構造などについて多くの研究者と協働ができれば、19世紀前半のインド経済の新たな位置付けはもちろん、当時の世界経済の再評価を行うことも可能ではないだろうか。今後の大きな課題として、一層研究を進めていきたい。

和文参考文献

ウィリアムズ, ジョナサン編 (湯浅越男訳) 『図説 お金の歴史全書』 (東洋書林, 1998年) [Uiriamuzu, Zyonasan hen, Takeo Yuasa yaku, *Zukai Okane no Rekisi Zensyo*, Toyô Syorin, 1998. (in Japanese)]

(37) 渡辺健一「19世紀の物価動向：コンドラチェフによる物価長波の検討を通じて」成蹊大学経済学部論集 34-1, 2003年。

(38) 中里「ベンガル藍一揆をめぐって (1)」, 138ページ; Bagchi, *The evolution of the State Bank of India: the roots, 1806–1876*, p.134.

(39) 大橋厚子「危機対応の社会組織研究をめざして——19世紀前半東南アジア試論」, 『国際開発研究フォーラム』, 43号, 2013年。

- 大橋厚子「危機対応の社会組織研究をめざして——19世紀前半東南アジア試論」, 『国際開発研究フォーラム』43号, 2013年 [Ôhasi, Atuko, “Kiki Taiô no Syakai Sosiki Kenkyû wo mezasite: 19seiki Zenhan Tonan Azia Siron”, *Kokusai Kaihatu Kenkyû Fôramu*, 43, 2013. (in Japanese)]
- 辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典』(平凡社, 1992年) [Karasima, Noboru hoka kansyû, *Minami Azia wo Siru Ziten*, Heibonsya, 1992. (in Japanese)]
- 神田さやこ「環ベンガル湾塩交易ネットワークと市場変容——1780–1840年」, 籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク——長期の19世紀』(世界思想社, 2009年) [Kanda, Sayako, “Kanbengaruan Siokôeki Nettowâku to Sizyô Henyô: 1780 kara 1840nen”, Naoto Kagotani, Kohei Wakimura hen, *Teikoku to Azia Nettowâku: Tyôki no 19seiki*, Sekai Sisôsha, 2009. (in Japanese)]
- 神田さやこ「19世紀前半のインド経済——「過渡期」をめぐる研究動向」, 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望——社会経済史学会創立80周年記念』(有斐閣, 2012年) [Kanda, Sayako, “19seiki Zenhan no Indo Keizai: ‘Katoki’wo meguru Kenkyû Dôkô”, Syakai Keizaisi Gakkai hen, *Syakai Keizaisigaku no Kadai to Tenbô: Syakai Keizaisi Gakkai Sôritu 80syûnen Kinen*, Yûhikaku, 2012. (in Japanese)]
- 黒田明伸『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』(岩波書店, 2003年) [Kuroda, Akinobu, *Kahei Sisutemu no Sekaisi: 〈Hitaisyôsei〉 wo Yomu*, Iwanami Syôten, 2003. (in Japanese)]
- 小谷汪之「国際商品市場とインド経済 2. 植民地支配下におけるインド社会の変容」, 辛島昇編『新版世界各国史 南アジア史』(山川出版社, 2004年) [Kotani, Hiroyuki, “Kokusai Syôhin Sizyô to Indo Keizai 2.Syokuminti Sihaika ni okeru Indo Syakai no Henyô”, Noboru Karasima hen, *Sinpan Sekai Kakkokusi: Minami Aziasî*, Yamakawa Syuppansya, 2004. (in Japanese)]
- 杉原薫「19世紀前半のアジア交易圏」, 籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク——長期の19世紀』(世界思想社, 2009年) [Sugihara, Kaoru, “19seiki Zenhan no Azia Kôekiken”, Naoto Kagotani, Kohei Wakimura hen, *Teikoku to Azia Nettowâku: Tyôki no 19seiki*, Sekai Sisôsha, 2009. (in Japanese)]
- 高橋昭子・水島司「人口と土地開発の長期変動」, 水島司・川島博之編『激動のインド第2巻 環境と開発』(日本経済評論社, 2014年) [Takahasi, Akiko, Tukasa Mizusima, “Zinkô to Toti Kaihatu no Tyôki Hendô”, Tukasa Mizusima, Hiroyuki Kawasima hen, *Gekidô no Indo: Dai2 kan. Kankyô to Kaihatu*, Nihon Keizai Hyôronsyô, 2014. (in Japanese)]
- 谷口謙次「18世紀後半のベンガルにおける銀不足問題とベンガル植民地政府財政」, 『経済学雑誌』第112巻4号, 2012年 [Taniguti, Kenzi, “18seiki Kôhan no Bengaru ni okeru Ginbusoku Mondai to Bengaru Syokuminti Seihu Zaisei”, *Keizaigaku Zassi*, 112(4), 2012. (in Japanese)]
- 谷口謙次「近世南アジアの貨幣制度と18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性」, 『松山大学論集』第24巻第4-2号, 2012年 [Taniguti, Kenzi, “Kinsei Minami Azia no Kahei Seido to 18seiki Bengaru ni okeru Kahei no Tayôsei”, *Matuyama Daigaku Ronsyû* 24(4-2), 2012. (in Japanese)]
- 谷口晋吉「18世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農民市場に関する一試論」, 『一橋論集』第116巻第6号, 1996年 [Taniguti, Sinkiti, “18seiki Kôhan Bengaru Nôgyô Syakai no Kaheika to Nômin Sizyô ni kansuru Itisiron”, *Hitotubasi Ronsyû* 116(6), 1996. (in Japanese)]
- 中里成章「ベンガル藍一揆をめぐる(1) ——イギリス植民地主義とベンガル農民」, 『東洋文化研究所紀要』83, 1981年 [Nakazato, Nariaki, “Bengaru Ai Ikki wo megutte (1): Igirisu Syokumintisyugi to Bengaru Nômin”, *Tôyô Bunka Kenkyûzyo Kiyô*, 83, 1981. (in Japanese)]
- 中里成章「インドの植民地化問題・再考」, 山内昌之編『岩波講座 世界歴史 23 アジアとヨーロッパ』(岩波書店, 1999年) [Nakazato, Nariaki, “Indo no Syokumintika Mondai Saikô”, Masayuki Yamauti hen, *Iwanami Kôza Sekai Rekisi 23: Azia to Yôroppa*, Iwanami Syoten, 1999. (in Japanese)]
- 根本敬『物語 ビルマの歴史』(中公新書, 2014年) [Nemoto, Kei, *Monogatari Biruma no Rekisi*, Tyûkô Sinsyo, 2014. (in Japanese)]

- 松本陸樹「イギリス東インド会社と19世紀イギリス議会資料——京セラ文庫「英国議会資料」の創設によせて」、『東南アジア研究年報』40, 1999年 [Matumoto, Mutuki, “Igirisu Higasi Indo Gaisya to 19seiki Igrisu Gikai Siryô: Kyôsera Bunko‘Eikoku Gikai Siryô’no Sôsetu ni Yosete”, *Tônan Azia Kenkyû Nenpô*, 40, 1999. (in Japanese)]
- 三木(神田) さやこ「18世紀末～19世紀前半におけるベンガルの穀物流通システム」、『社会経済史学』第66巻第1号, 2000年 [Miki(Kanda), Sayako, “18seiki Matu kara 19seiki Zenhan ni okeru Bengaru no Kokumotu Ryûtû Sisutemu”, *Syakai Keizaisigaku*, 66(1), 2000. (in Japanese)]
- 渡辺健一「19世紀の物価動向——コンドラチェフによる物価長波の検討を通じて」、『成蹊大学経済学部論集』34-1, 2003年 [Watanabe, Ken'ichi, “19seiki no Bukka Dôkô: Kondoratiehu ni yoru Bukka Tyôha no Kentô wo Tûzite”, *Seikei Daigaku Keizai Gakubu Ronsyû*, 34(1), 2003. (in Japanese)]

要旨: 本稿では、19世紀前半のインドにおける貴金属貿易および貨幣鑄造について数量データを用いて分析し、当時貨幣不足が生じ、経済不況を招いたのかを考察する。1820年代から40年代に貴金属不足や貨幣不足は生じていたのか、地域的な差異は存在したのか、貴金属貿易と貨幣鑄造にどのような関係があり、不況にどのような影響を与えたのか、こうした問題を取り上げる。

キーワード: インド経済史, 19世紀インド, アジア貿易史, インド貨幣史, 植民地史